

## 縄文時代の再葬

設楽博己

はじめに

### 一 研究史

#### 二 縄文後・晩期の再葬事例

#### 論文要旨

いったん遺体を骨にしてから再び埋葬する葬法を、複葬と呼ぶ。考古学的な事象からは、死の確認や一次葬など、複葬制全体を明らかにすることは困難で、最終的な埋葬遺跡で複葬制の存在を確認する場が多い。そうした墓を再葬墓、その複葬の過程を再葬と呼んでいる。東日本の初期弥生時代に、大形壺を蔵骨器に用いた壺棺再葬墓が発達する。その起源の追究は、縄文時代の再葬にさかのぼって検討する必要がある。

縄文後・晩期の再葬は、普遍的葬法といえるものはまれであるものの、南東北地方から近畿地方にいたる比較的広い地域に広がっていた。再葬法には遺骨を集積した集骨葬や、土器に納めた土器棺再葬、人骨を破壊して四角く組んだ盤状集骨葬や、人骨を焼いて埋葬した焼人骨葬などがあり、けっして縄文後・晩期の再葬も一樣ではない。縄文時代には、生前の血縁関係や年齢に応じたつながりを死後も維持するためと思われる合葬がしばしばおこなわれるが、再葬のひとつの要因として合葬が考えられる。そうした再葬を伴う合葬のなかには、祖先や集落の始祖に対する意識の萌芽的な側面が指摘できるものもある。しかし、同様な形態の再葬でもその内容が同じとはいえず、さらに長い年月の間、その性格も不変のものではありえないと思われる。地域間の相互交流、再

### 三 縄文晩期再葬の地域色

#### 四 縄文後・晩期再葬の特質と変遷

おわりに

葬の際の骨の扱い方の変化など再葬法の時代的な変化を整理することにより、そうした多様性の内実に近づくことが可能だろう。

中部高地の縄文晩期の再葬の特色は、多人数の遺骸を処理する焼人骨葬であり、それは北陸に広がり、伊勢湾、近畿地方に伝播した。一方、中部高地には伊勢湾地方の集骨葬が影響を与えた可能性がある。再葬の際の骨の取り扱い方という点では、縄文後期に顕著であった全身骨再葬と、頭骨重視の傾向が晩期初頭～前葉にも引きつがれる一方、それ以降部分骨再葬や中期にさかのぼる遺骨破壊の行為も比較的広範囲に広まるように、晩期前葉を過渡期として遺骨の取り扱いにも変化がみられるようになる。

晩期中葉の近畿地方では部分骨再葬と結びついた土器棺再葬をおこなっていた。土器棺再葬を部分骨再葬とみなせば、焼人骨はその残余骨の処理であったと考えられ、遺骨破壊の必要性が高まった反面、遺骨保存の措置が採られた二重構造を想定することができる。多様な再葬の形態と相互の影響関係が認められる近畿地方から中部高地の内陸地帯で、晩期中葉には集骨葬が衰退するなか、類例は少ないが土器棺再葬と焼人骨葬が晩期終末まで継続するのは、弥生時代の壺棺再葬墓の成立を考えるうえで重要な現象である。

## はじめに

一九三九年、田中国男は茨城県女方遺跡の発掘をおこない、一九四一年までに合計四一基の土坑と、二〇〇個体をこえる土器を検出した。田中が女方の遺跡で発掘したこれらの土坑は、直径が二メートルに満たない小さなもので、その中に通常数個体の壺形土器を肩を接して納めたものであった。遺跡からはその他の遺構はほとんど見つからず、住居跡もなく、貯蔵穴とも考えられないこの遺構に対して田中が下した判断は、筑波山をのぞむ祭祀跡というものであった。西日本の弥生文化に特有な青銅器の埋納祭祀との共通性を考え、古墳時代の土器を用いた祭祀をその延長上に位置づけたのである〔田中 一九四四〕。杉原庄介の新潟県六野瀬遺跡の発掘とならんで、このタイプの遺跡の計画的な発掘調査はこれが初めてであった。その後、こうした遺構の性格については、さまざまな議論があったが、一九六三年から六四年にわたる、千葉県天神前遺跡の発掘調査で、頸の細い壺形土器の中から成人の骨が検出されるに至り、女方遺跡以来問題になっていた土坑が、遺体を骨にしてから壺に入れて再び埋葬した、いわゆる再葬墓であることがつきとめられた〔杉原ほか 一九七四〕。

女方遺跡の発掘から約半世紀、天神前遺跡から四半世紀あまりが過ぎ、壺形土器を主要な蔵骨器とするこの壺棺再葬墓〔石川 一九八一〕遺跡の数も一〇〇を超すようになった。この間に、壺棺再葬墓は縄文晩期終末

から弥生中期中葉のおよそ二世紀にわたって、愛知県から宮城、山形県にいたる地域で盛行することが確められ、どういふ葬儀の過程を経てこれら再葬墓が形成されたか、という葬送のプロセスなどが追究された。こうした研究の進展には、壺棺再葬墓が分布する地域の初期弥生時代遺跡の調査はなぜか集落跡に恵まれず、再葬墓ばかりが例を増していくという状況が作用していることも否めない。この地域の弥生時代の始まりの研究は、すなわち壺棺再葬墓の研究であった。

したがって、壺棺再葬墓がどのようにして出現したか、という起源の問題は、東日本の弥生時代の開始を考えるうえで、欠かすことのできない研究のひとつに位置づけられた。これには二つの研究の流れがある。ひとつは縄文文化の側から、この葬墓制にみられる伝統的な要素を探る研究であり、ひとつは弥生文化の側から、新たな要素を見いだす研究である。これはどちらも重要であり、こうした両者からの接近により壺棺再葬墓成立の起源の問題にせまることができるだろう。本稿では、前者の立場から壺棺再葬墓成立以前の縄文時代にさかのぼって、再葬のありかたを探り、壺棺再葬墓成立のバックグラウンドを固めておきたい。したがって、縄文時代とはいっても壺棺再葬墓成立にかかわる東北地方から近畿地方の縄文後・晩期を中心とし、晩期終末の壺棺再葬墓成立以前の再葬を扱うことにする。

## 一 研究史

### (一) 個別の研究と包括的研究

縄文時代に再葬の習俗があったことは、比較的古くから学界に知られていた。一九一八年に笠井新也が青森県天狗岱遺跡の「笠井一九一八」、一九三四年には喜田貞吉が青森県山野峠（久栗坂）遺跡の再葬墓「喜田一九三四」を報告した。これらはともに縄文時代後期の再葬土器棺墓であった。一九二五年には清野謙次が愛知県貝塚から発掘した、人骨を四角く集積した例を報告し、これを「人骨の盤状集積」と名づけた「清野一九二五」。研究の初期においては、このように形質人類学にたずさわる者や、歴史学者により縄文時代の再葬風習が注目されたのである。こうした傾向は、人種・民族論による遺物や習俗の意味づけという戦前に支配的だった考古学研究の趨勢を背景とするものであった。したがって、人種・民族論争や人骨採集ブームの衰退とともに、縄文時代の再葬に対する関心も失われていった。

こうした戦前の事例が再び注目されるのは、戦後だいたいあってからである。青森県の再葬土器棺墓の研究は、江坂輝彌による形質人類学者をまじえた山王峠遺跡の調査〔江坂一九六七〕によって再開され、「改葬甕棺墓」と名づけて類例を集めた論文も出された〔江坂一九六八〕。この研究を受け継いだ葛西励は、一九七二年頃から矢継ぎばやに「改葬甕棺墓」遺跡の発掘調査成果を報告し、一九八三年には青森県下の三六遺跡を集

成して、土器棺墓・石棺墓・土坑墓からなる再葬墓とその葬制を、実証的に復元した〔葛西一九八三〕。また、青森県の「改葬甕棺墓」からは、遺存状態が良好な人骨が出土する例が多く、森本岩太郎はこれらに形質人類学的、民族学的検討をくわえた〔森本一九八八〕。

「人骨の盤状集積」については久永春男・斎藤嘉彦らの注目するところとなり、一九七五年には、五遺跡七例を集成して、それが偶然的改葬ではなく、一般的な葬法のなかの特定形態とみなし、風習的再葬であることを主張した〔久永ほか一九七五〕。石川日出志による「人骨の盤状集積」の検討〔石川一九八一〕を経て、上敷領久はさらに事例を追加して、この葬法の意味するところを論及している〔上敷領一九八七〕。

一九五二年に発掘調査された福島県三貫地遺跡からは、十個内外の頭骨をサークル状に並べ、それ以外の骨を集積した人骨が二群出土し、その特異性が注目されていた〔吉田一九六四〕が、一九八八年に正式の調査報告書が刊行され、集骨を含む埋葬にいろいろな角度から考察が加えられた〔森ほか一九八八〕。古くから人骨が大量に出土していた愛知県伊川津遺跡が一九八四年に発掘調査され、一九八八年に報告された。四三体の人骨が発掘され、そのうちの二二体が再葬であることがわかり、縄文時代は時期によっては、再葬を予想以上に多くおこなっていたことが確認された〔春成ほか一九八八〕。中村健二は近畿地方の縄文晩期の墓制を整理したなかで、土器棺再葬墓の問題を論じた〔中村一九九二〕。縄文時代の再葬は個別の地域においてそれぞれ特色をもち、短期間ではあるものの普遍性をもつもののあることが、こうして確かめられていった。

縄文時代の再葬の一形態として、焼人骨の問題がとりあげられた。長野県では野口遺跡などが調査され〔林一九六二〕、岩手県八天遺跡の焼人骨は再葬の観点から分析され〔林ほか一九七九〕、高山純は焼獣骨を集成したなかで焼人骨の問題にも言及した〔高山一九七六・七七〕。甕棺葬など個別の葬法の埋葬例を集成して比較するなかで、再葬がどういう意味をもつのかを探る研究〔菊池一九八三〕や、縄文時代の葬墓制のなかでの再葬の位置づけに関する研究〔永峯一九八四、春成一九八八〕もおこなわれ、事例の増加に伴い、縄文時代の再葬全般に関する包括的研究も現われた〔国分一九六八、小野崎一九七四、斎藤一九七七〕。一九八八年、渡邊朋和は、「縄文時代の複葬制について―「再葬墓」の系譜を求めて―」と題する講演の要旨を発表した〔渡邊一九八八〕。雑誌の性格上短報であり、意を尽くしていないところもあるが、六〇遺跡にも及ぶ縄文時代の再葬例の集成や、型式分類、縄文再葬の特質に対する理解、弥生時代の壺棺再葬墓成立への見通しには、体系だった研究の片鱗がうかがえる。

(二) 壺棺再葬墓とのかかわり

弥生時代の壺棺再葬墓の起源は、再葬墓の研究において重要な問題として多くの研究者がとりあげている。杉原荘介は、弥生時代の壺棺再葬は東日本の縄文時代の再葬にその起源があることを説いた。それは、福島県成田藤堂塚遺跡の発掘調査をきっかけとするものだった。成田藤堂塚遺跡のM地点の小竪穴からは複数の土器が出土し、そのうちのあるものに骨片が含まれていることが確認された。そしてこれが晩期後葉の、大

洞C<sub>2</sub>式であったことから、先の説を導いたのである〔杉原一九六八〕。

星田亨二は杉原説に反論した。星田は愛知県牛牧遺跡の土器棺葬を洗骨と考え、農耕文化の東日本への波及によってこうした墓制が壺棺を採用して壺棺再葬墓が成立し、農耕文化の波及とともに東方に広まった、とした〔星田一九七四・七六〕。杉原も壺棺再葬墓と農耕文化の結びつきは指摘していたが、星田はその直接の起源を三河地方方面に求め、より積極的に壺棺再葬墓の成立と普及の背景に農耕文化を据えたのである。

こうした星田の視点は石川日出志が継承した。石川は、縄文時代の再葬を整理するなかで、人骨の盤状集積を含む再葬が卓越する三河地方を重視し、愛知県吉胡遺跡の壺棺再葬墓の起源が三河地方の縄文晩期再葬に求められることを述べ、より東の壺棺再葬墓の展開にも影響を与えたことを暗示した〔石川一九八二〕。石川は、その後中部高地における焼人骨が再葬的側面をもつことを重視し〔石川一九八三・八七〕、縄文・弥生時代の焼人骨を集成して弥生時代の壺棺再葬に伴う焼人骨との系譜関係を論じた〔石川一九八八〕。

春成秀爾は、伊川津遺跡の発掘調査を契機として、東日本の弥生時代の再葬の問題にせまった。春成は東日本の弥生時代初頭の人骨に、上顎の犬歯二本と下顎の切歯四本を抜くのを基本とする4I系という、それ以前は三河地方以西で顕著にみられた抜歯型式が広まることと、関東・東北南部の壺棺再葬墓に三河系の初期弥生土器である条痕土器がしばしば含まれていることから、三河から東国への移住者の存在に注意を促した〔春成一九八六〕。

このように東国における壺棺再葬に対しては、農耕文化の波及の問題を背景に三河や中部地方の縄文時代の再葬にその起源を求める声が高い。その一方、福島県では近年、かつて杉原が壺棺再葬墓の祖形とみなした成田藤堂塚遺跡の土坑と同じ形態のものが検出されたり、さらにその時期の壺形土器埋設土坑も発掘され、杉原説再評価の機運がある〔大竹一九九二〕。三河地方とともに古い壺棺再葬墓が存在する福島県下での壺棺再葬墓の研究は、土器の分析などを中心として蓄積されつつある〔中村一九八二・八八、石川一九八四、須藤ほか一九八四、鈴木一九八五、志賀一九八六、須藤一九九〇、設楽一九九二〕。壺棺再葬墓の起源を考えると、こうしたもともとも古い壺棺再葬墓に対する接近とともに、それに先立つ縄文時代の再葬を、壺棺再葬墓が出現する地域を中心として整理する作業が是非とも必要なのである。

## 一 縄文後・晩期の再葬事例

現在知り得た壺棺再葬墓出現以前の縄文時代における再葬例は、八〇遺跡<sup>(1)</sup>におよぶ(表1)。日本列島でもっとも古い再葬例は、大分県粉洞穴や二日市洞穴のような縄文早期中葉の洞穴遺跡の例とされる。愛媛県上黒岩岩陰では、第四次調査において、人骨が七体検出された。このうち成人男性二体と、幼児一体が円形のピットに一括して埋葬されていた。森本岩太郎らの報告によれば、再葬か改葬の状態であることは明らかで、ピットの底に頭骨や下顎骨を置き、その隙間に細かく小さな骨を重ね、

さらにその上に、大腿骨などの長い骨を束にして積み重ねていた〔森本ほか一九七〇、森本一九八八〕。縄文早期のこうした事例はこの三例の他にも長崎県で一例、大分県で一例知られており、偶然の所産ではなさそうであるが、岩陰という狭い範囲のなかに埋葬場所を定めたために生じた改葬<sup>(2)</sup>―先葬者の遺骨の再埋葬―との識別になお問題を残す。

つづく縄文前・中期にも若干の再葬例はあるが、事例が著しく増加するのは後・晩期である。ここでは弥生時代の再葬とのかかわりという点から、縄文後期以降の再葬に焦点を当てて考察を加える。その際、まず集骨葬、土器棺再葬という施設<sup>(3)</sup>の差で区分して類例にあたる。さらに、それらにしばしば見られる焼けた人骨の事例に触れつつ、壺棺再葬墓出現以前の縄文後・晩期、とくに晩期の再葬の性格と地域的特色について論述する。

### (一) 集骨葬の諸例と散乱骨・部分欠失人骨

考古学的な再葬の識別は、解剖学的に正位置を保たない人骨の埋葬形態の確認から始まる。解剖学的に正位置を保たず、ある程度整った集積状態を示す埋葬人骨は、一般的に集骨と呼ばれる。集骨状態の埋葬、すなわち集骨葬は、一く数体の人骨を集めた一般的な少数集骨葬と、多くは一〇体以上の人骨を集積した多数集骨葬、特殊な集積状態である盤状集骨葬などに区分できる<sup>(4)</sup>。また、解剖学的な正位置を保たないものの、不規則な散乱状態を示すものは散乱骨と呼ばれる。集骨葬に限ったことではないが、再葬人骨の一次葬の場合は常に問題となる。それを考えるう

表1 縄文時代の再葬と関連資料

11	10	9				8	7		6	5	4	3	2	1	No	
		5	4	3	2		1	2								1
町・天狗伝遺跡	青森県青森市駒込・月見野遺跡	青森県南津軽郡浪岡	青森県青森市久栗坂	青森県三戸郡倉石村・太田遺跡	青森県三戸郡倉石村・山形峠遺跡1号	青森県三戸郡倉石村・太田遺跡	青森県三戸郡三戸町・泉山遺跡田区田層	青森県三戸郡倉石村・上ノ平遺跡	青森県三戸郡倉石村・薬師前遺跡	青森県三戸郡倉石村・薬師前遺跡	青森県上北郡六ヶ所村・鷹架遺跡第13号ピット	青森県上北郡六ヶ所村・表館遺跡	青森県むつ市・館農12号遺跡	北海道釧路市・緑ヶ丘	1	
土器棺再葬	土器棺再葬	土器棺再葬	土器棺再葬	土器棺再葬	土器棺再葬	土器棺再葬	散乱骨	散乱骨	土器棺再葬	土器棺再葬	土器棺再葬	土器棺再葬	土器棺再葬	土器棺再葬	再葬の形態	
石柩・土器棺	土器棺	石柩・土器棺	石柩・土器棺	石柩・土器棺	石柩・土器棺	土器棺	なし	土器棺	第二号棺	第二号棺	cm・第一号棺	円形土坑(一二〇〇×一〇〇cm)・P1土器棺	P2土器棺	円形土坑(一二〇〇×一八〇m)	再葬施設	
?	一体	?	?	?	?	一体?	?	?	一体	?	一体	?	?	八体	遺体数	
															人骨番号	
?	男性	?	?	?	?	女性	?	女性	女性	?	男性	?	女性	男性二・女性二・不明四	性別	
?	壮年	?	?	?	?	三〇〜四〇歳	成人	?	壮年	壮年	?	?	青年(十八〜十九歳)	成年四・不明四	年齢	
かば散逸	頭骨・肋骨・上腕骨・腕骨・大腿骨・脛骨			頭蓋骨や大腿骨などの諸骨が一括して納入されているとされるが、詳細は不明	?	肋骨の一部・細骨片	骨片三個	頭・肩・鎖・肋・椎・胸・腸・上下肢骨	頭・鎖・脛・上腕・腕・寛・大腿・脛骨	頭骨(その他は保存不良で不明)	頭骨・肩甲骨・鎖骨・椎骨・上下肢骨・手骨・寛骨・膝蓋骨・足骨	骨粉?	細骨片	頭・頸・胸・腰・仙・鎖・肋・上腕・尺・寛・大腿・脛・膝・足骨	頭骨・四肢骨など	人骨の部位等
						焼けている	焼けている									焼入骨
																技術形式
	出土	出土?	出土?	土器二個体あり。一個体から骨が出土?	土器二個体あり。一個体から骨が出土?	土器二個体あり。一個体から骨が出土?	土器二個体あり。一個体から骨が出土?	再葬か否かは不明	土坑から土器棺二個体	土坑から土器棺二個体	土坑から土器棺二個体	土坑から土器棺二個体	土坑から土器棺二個体	土坑から土器棺二個体	土坑から土器棺二個体	備考
後期前葉	後期前葉	後期前葉	後期前葉	前期前葉	後期前葉	後期初	中期?	後期初頭	後期初葉	後期初葉	後期前葉	後期前葉	後期前葉	晚期後葉	時期	
笠井一九一八	森本一九八八		喜田一九三四 葛西一九七五		葛西一九七四		市川ほか一九七六		葛西一九八三		市川一九七九 森本一九八八		遠藤ほか一九八一		江坂一九六八 宇田川一九七七	文献

縄文時代の再葬

21		20			19	18	17		16	15			14		13		12
2	1	3	2	1			2	1		3	2	1	2	1	2	1	
"	福島県相馬郡新地町・三貫地貝塚番外A	"	"	"	秋田県北秋田郡鷹巣町・藤株遺跡SK05	宮城県気仙沼市・田柄貝塚第4土坑墓	"	H153ノ遺構	岩手県北上市栗木町・八天遺跡G-26ノ遺構	"	"	青森県南津軽郡平賀町・畑合田号遺跡1号組石棺	青森県南津軽郡平賀町・畑合田号遺跡A	"	青森県南津軽郡平賀町・畑合田号遺跡B	青森県南津軽郡平賀町・畑合田号遺跡C	青森県南津軽郡平賀町・松山遺跡
多人数集骨葬	多人数集骨葬	焼骨葬	焼骨葬	焼骨葬	焼骨葬	多人数集骨葬	焼骨葬	焼骨葬	焼骨葬	集骨葬	少人数集骨葬	集骨葬	土器棺再葬	土器棺再葬	土器棺再葬	土器棺再葬	土器棺再葬
?	?	石?	石?	石?	配石遺構(環状列)	配石遺構(環状列)	配石遺構(環状列)	配石遺構(環状列)	配石遺構(環状列)	石棺(二〇〇×七〇cm)	石棺(二〇〇×七〇cm)	石棺(二〇〇×七〇cm)	石棺(二〇〇×七〇cm)	土器棺	土器棺	土器棺	土器棺No.1
一三二?	十七体以上?	?	?	?	一体	三体	二体以上	二体以上	二体以上	一体	六体以上	六体以上	?	?	?	?	?
						4・5・7号					1・6号						
五・不明三	男性三・女性二以外は不明	?	?	?	女性?	男性二・4・5号、不明一・7号	男性一・女性一	?	女性を含む	?	男性	男性一・1・3号、女性一・4号、?・5・6号	?	?	?	?	男性
二・壮年二	男性一・熱二・社一・青一	成人を含む	成人を含む	成人を含む	成年ないし熱年	壮年二・4・5号、乳児六ヶ月一・7号	成人	成人二・未成年(十歳以下)	二・三歳の幼児から五歳以上の老人	?	成人	成人四・一・五・6号	?	?	?	?	成人
頭骨・脛骨・膝骨など	頭骨・脛骨・尺骨・大	頭骨・脛骨・尺骨・大	頭骨・脛骨・尺骨・大	頭骨・脛骨・尺骨・大	頭骨・脛骨・尺骨・大	4・5号は手骨・足骨の一部を欠く全身骨、7号は頭骨のみ	頭蓋骨・椎骨・胸骨・肋骨・上肢骨・手骨・足骨計八二九・七	頭蓋骨・椎骨・胸骨・肋骨・上肢骨・手骨・足骨計六六四・五	頭・肩・頸・椎・胸・腕・尺・手・大・小・腰・膝蓋・足	粉未状の骨	大腿骨・粉未状体股骨	頭蓋骨・歯・上腕骨・大腸骨・脛骨	?	顎骨(一)・歯細片多数	四肢骨の一部	頭蓋骨・四肢骨	骨片
		焼けている	焼けている	焼けている	焼けている		焼けている	焼けている	焼けている								
二・2C	0型・男								0型・七								
そのなかに四肢骨を集	頭骨を環状に配列し、そのなかに四肢骨を集めた集骨	頭骨を環状に配列し、そのなかに四肢骨を集めた集骨	頭骨を環状に配列し、そのなかに四肢骨を集めた集骨	頭骨を環状に配列し、そのなかに四肢骨を集めた集骨	頭骨は配石の下から木炭とともに出土	頭骨は配石の下から木炭とともに出土	頭骨は配石の下から木炭とともに出土	頭骨は配石の下から木炭とともに出土	頭骨は配石の下から木炭とともに出土	人骨は石棺内の一ヶ所に集積、頭蓋骨は棺底に接し、上に体肢骨	人骨は石棺底部付近	人骨は石棺底部付近	人骨は石棺底部付近	人骨は石棺底部付近	人骨は石棺底部付近	人骨は石棺底部付近	土器棺は三個並んで出土。詳細は不明
?	後期終末	?	?	?	晩期初頭	後期前葉	後期後半	後期?	後・晩期	後期初頭	後期初頭	後期初頭	後期初頭	後期初頭	後期初頭	後期初頭	後期前葉
	森ほか一九八八				高橋ほか一九八一	阿部ほか一九八六		林ほか一九七九	野坂ほか一九八二			葛西ほか一九七四					葛西一九七三





縄文時代の再葬

42		41	40	39		38	37	36	35	34	33	32		31	30			
2	1			2	1							2	1		3	2	1	
" SKP05	長野県小県郡九子町・深町遺跡SK09	長野県埴科郡坂下町・保地遺跡	長野県埴科郡戸倉町・輻田遺跡環状列石第IIブロック	"	3号埋藏	長野県長野市若穂保科・宮崎遺跡8号石棺	長野県上水内郡中条村・宮崎遺跡石墓	山梨県北巨摩郡長坂町・上条遺跡	山梨県北巨摩郡大泉村・金生遺跡第1号配石	山梨県西須城郡青海町・寺地遺跡伏配石	新潟県佐渡郡真野町・浜田遺跡	神奈川県横須賀市佐原・茅山貝塚	"	千葉県原市原市福田・祇園貝塚B2,43区	千葉県原市原市・武士遺跡	B4,85区	B4,94区	千葉県原市原市・西広貝塚F5区
集骨葬?	少人数集骨葬	葬?	少人数集骨葬	焼骨葬	土器棺再葬	少人数集骨葬 あるいは一次葬の散乱骨	少人数集骨葬	焼骨葬	焼骨葬	焼骨葬	散乱骨	散乱骨	多人数集骨葬	多人数集骨葬	集骨葬?	少人数集骨葬	少人数集骨葬	少人数集骨葬
楕円形土坑(一〇〇×八〇cm)	不整形土坑(一〇〇×六〇cm)	楕円形土坑(一〇〇×八〇cm)	楕円形土坑(一〇〇×六〇cm)	楕円形土坑(一〇〇×六〇cm)	楕円形土坑(一〇〇×六〇cm)	楕円形土坑(一〇〇×六〇cm)	楕円形土坑(一〇〇×六〇cm)	楕円形土坑(一〇〇×六〇cm)	楕円形土坑(一〇〇×六〇cm)	楕円形土坑(一〇〇×六〇cm)	楕円形土坑(一〇〇×六〇cm)	楕円形土坑(一〇〇×六〇cm)	楕円形土坑(一〇〇×六〇cm)	楕円形土坑(一〇〇×六〇cm)	楕円形土坑(一〇〇×六〇cm)	楕円形土坑(一〇〇×六〇cm)	楕円形土坑(一〇〇×六〇cm)	楕円形土坑(一〇〇×六〇cm)
?	一体	一体	一体	一体	一体	一体	一体	一体	十一体以上	十一体以上	一体	一体	最少六体	最少六体	一体	一体	一体	
				3号埋藏下出土人骨	3号石棺墓人骨	2号									39号	38号	26号	
?	男性	男性	?	?	?	?	?	?	女性一体以外は不明	?	?	?	?	?	女性	女性	男性	
?	壮年	熟年	成年	青年成人	青年?	青年?	青年?	青年?	おむね成人未成人一骨体を含む	?	?	?	?	?	壮年	壮年	熟年	
?	頭骨・上腕骨・脛骨・大腸骨	頭骨	頭蓋骨片	骨片(土器の中)・下顎骨(土器の下)	頭骨・上腕骨・大腸骨・脛骨・腓骨	頭骨・頭骨	頭蓋骨片・脛骨片・その他細片	大腸骨片・頭骨	頭・頸・胸・腰・鎖・肩甲・上腕・腕・尺・手・寛・大腸・脛・腓・足骨計三二六〇g	?	頭蓋骨片・下顎骨片	頭骨や大腸骨などの長管骨。詳細は不明	頭骨や大腸骨などの長管骨。詳細は不明	?	頭骨	?	大腸骨	
			焼けている				焼けている	焼けている	焼けている	焼けている	焼けている							
	2C型	2C型							2C型が一〜二個体存在									
	土坑の中に土器棺が埋設されている	大腸骨を又状に組み、頭蓋骨を含む。遺跡からは焼骨を含む破砕土坑の中に土器棺が埋設されている	頭骨は灰・炭・鹿や猪の骨とともに出土	配石遺構は焼けていない。ほかの配石には焼骨が伴う	各骨は自然の連結状態を示さない。散乱状態を示さない。土器の中からは別な土器片を散らす。下から下顎骨が出土	頭蓋骨は自然の連結状態を示さない。散乱状態を示さない。土器の中からは別な土器片を散らす。下から下顎骨が出土	頭蓋骨は自然の連結状態を示さない。散乱状態を示さない。土器の中からは別な土器片を散らす。下から下顎骨が出土	頭蓋骨は自然の連結状態を示さない。散乱状態を示さない。土器の中からは別な土器片を散らす。下から下顎骨が出土	灰・木炭・焼骨とともに出土。焼入骨は細片化している	灰・木炭・焼骨とともに出土。焼入骨は細片化している	灰・木炭・焼骨とともに出土。焼入骨は細片化している	灰・木炭・焼骨とともに出土。焼入骨は細片化している	灰・木炭・焼骨とともに出土。焼入骨は細片化している	灰・木炭・焼骨とともに出土。焼入骨は細片化している	灰・木炭・焼骨とともに出土。焼入骨は細片化している	灰・木炭・焼骨とともに出土。焼入骨は細片化している	灰・木炭・焼骨とともに出土。焼入骨は細片化している	
後・晩期	晩期前葉	晩期前葉	中期後葉	晩期終末	後期?	後期	後・晩期	晩期前葉	後・晩期	後・晩期	後期前葉	後期前葉	後期前葉	後期前葉	中期終末	晩期前葉	晩期	後期
	林はか一九七九	関一九六六	金子はか一九六五		矢口はか一九八八		小林一九八二	大山はか一九四一	新津はか一九八九	関はか一九八七	関はか一九七五	西村一九五一	米田一九八〇	千葉県一九九〇			米田はか一九七七	

50			49	48	47		46	45	44					43	3			
3	2	1			2	1			7	6	5	4	3			2	1	
"	"	"	愛知県宝飯郡小坂井町・稲荷山貝塚34号	岐阜県益田郡萩原町・桜洞遺跡P20	長野県木曾郡日義村・芝垣外遺跡	"	2号配石	長野県伊那市手良・野口遺跡石積整穴式墳墓	長野県茅野市・御射宮司遺跡F7号土坑	"	"	"	"	"	"	長野県東筑摩郡明科町・北村遺跡	"	
少年数集骨葬	少年数集骨葬	少年数集骨葬	焼骨葬	焼骨葬	焼骨葬	焼骨葬	焼骨葬	焼骨葬	焼骨葬	焼骨葬	焼骨葬	焼骨葬	焼骨葬	焼骨葬	焼骨葬	土器棺再葬	土器棺再葬?	
?	?	?	配石土坑(配石の規模は二〇〇×一六〇cm)	?	配石の周辺	配石(二一四mの楕円形、円形配石の集合)	長方形石柩(四二〇×一九〇cm)・円形配石	不整形土坑(六〇×五〇cm)	土坑?	土坑?	八〇cm	円形土坑(八五×八〇cm)	楕円形土坑(一一〇×九〇cm)	ヒョウタン形土坑(一一四×九〇cm)	楕円形土坑(一一四×九五cm)	楕円形土坑(一〇〇×九五cm)	楕円形土坑(一三〇×九〇cm)	長楕円形土坑(一一四×九〇cm)
数体	数体	一体	最少七体	?	最少二体	十二体以上	最少三二	一体	?	?	?	?	?	?	?	一体	?	
		34号																
?	男女とも	男性	?	?	?	男性的な個体と繊細な個体	?	?	?	?	?	?	?	?	?	男性	?	
?	?	?	?	?	?	成人以上の高齢者	?	?	?	?	?	?	?	?	?	熟年	?	
?	?	頭骨・頸椎骨	頭骨・椎骨・上腕骨・尺骨・橈骨・大腸骨・	?	頭・椎・上腕・尺・橈・骨	頭骨のほかは明らかでない	頭骨・四肢骨などのほか詳細は不明	?	頭骨・長骨・指骨など少ない	頭骨・尺骨	上腕骨・尺骨	腕骨・大腸骨・脛骨	頭骨・尺骨・橈骨・上腕骨・大腸骨・脛骨	頭骨・椎骨・肋骨・肩骨・大腸骨・尺骨・指骨	頭骨・椎骨・肋骨・鎖骨・上腕骨・尺骨・大腸骨・脛骨	?	頭骨・四肢骨など全身骨粉状で多量に残存している?	
		焼けている	焼けている	焼けている	焼けている	焼けている	焼けている	焼けている	焼けている	焼けている	焼けている	焼けている	焼けている	焼けている	焼けている	焼けている	焼けている	
							2C・4	2C型										
不規則な人骨の集積		鹿角製腰飾が同伴	焼人骨は細片化して、礫と共に、礫・土坑底とも火を受けている	詳細は不明	焼人骨は方形石囲み周辺から出土。焼散骨と共に伴う	焼人骨は細片で三平方メートルの範囲から出土。人骨は故意に砕かれ、数cmの層を形成	焼人骨は細片で三平方メートルの範囲から出土。人骨は故意に砕かれ、数cmの層を形成	焼人骨は細片で三平方メートルの範囲から出土。人骨は故意に砕かれ、数cmの層を形成	土坑は焼けていない。焼人骨を納め、土器破片をかぶせている				土坑は焼土・炭化材の下から出土。焼けた鹿角を伴う	土坑は焼土・炭化材の下から出土。焼けた鹿角を伴う	土坑は焼土・炭化材の下から出土。焼けた鹿角を伴う	土坑は焼土・炭化材の下から出土。焼けた鹿角を伴う	土坑は焼土・炭化材の下から出土。焼けた鹿角を伴う	土坑は焼土・炭化材の下から出土。焼けた鹿角を伴う
晩期?	晩期?	晩期?	晩期?	晩期?	晩期終末	晩期前葉	晩期前葉	晩期終末	中期?	中期中葉	中期中葉	中期中葉	中期中葉	中期中葉	中期中葉	中期後葉	後・晩期	
	清野一九六九		橋ほか一九七四	橋ほか一九七四	信濃史料刊行会一九五六	新谷ほか一九八八	樋口一九六七	林ほか一九六一 林一九八三	百瀬ほか一九八二				会田ほか一九八六			長野県埋文センター調査		

52					51											
5	4	3	2	1	9	8	7	6	5	4	3	2	1	5	4	
" 11号人骨群	" 7号人骨	" 6号人骨群	" 4号人骨群	" 愛知県渥美郡渥美町・伊川津貝塚1号人骨群	調査 " 第16号(中山)	87号 " 第184号 (清野調査)	" 第164号 (清野調査)	" 第109号 (清野調査)	" 第48号・49号 (清野調査)	調査 " 第44号(清野)	調査 " 第5号(清野)	調査 " 第4号(清野)	調査 " 第3号(清野)	愛知県渥美郡田原町・吉胡貝塚第3号(清野調査)	" SK57	" SK40
整状集骨群	一次葬?	多人数集骨群	少人数集骨群	整状集骨群	整状集骨群	少人数集骨群	整状集骨群	少人数集骨群	少人数集骨群	整状集骨群	少人数集骨群	少人数集骨群	少人数集骨群	少人数集骨群	少人数集骨群	少人数集骨群
?	四八cm 円形土坑(五〇×)	長楕円形土坑(二〇〇×一三〇cm) (自)	五〇cm 円形土坑(六〇×)	土坑(七〇×六〇cm?)	?	?	?	?	?	?	?	?	?	長楕円形土坑(八〇×九八cm) 〇×?cm	円形土坑(二〇〇×九八cm)	
二体	一体	十三体	二体	三体	一体	最少四体	四体	数体分	最少三体	一体?	一体	二体	一体	一体	一体	一体
Na11-1号・2号	7号	Na6-1・13号	Na1号・2号	Na1-1号・13号	16号	7号 444444	4241 IV号	369号	308号・309号I・II号	304号	265号	264号I・II	263号	No3	No2	
女性・2号	?	9・10・12・13号 女性・11号	不明・2号 女性・1号	男性・1号 女性・2号・3号	男性	男性四・4	男性四・I IV号	男性一体あり 091号	男性・308号・309号 女性・303号	?	女性	男性・1号・女性	女性	男性?	?	
熟年・2	幼児(二歳)	11号・幼児 9・10号・乳児 13号	不明・2号 老幼・1号	老幼・1号 幼生・6歳前 後・2号	成年	44445号 壮年・2号	壮年・3号 I III号・壮年・IV号	壮年・男性	老幼・女性 熟年・女性	?	熟年	壮年・男性 熟年・女性	壮年	少年(二三歳前後)	少年(二三歳前後)	
脛骨・尺骨・大腸骨・2号・頭骨	頭蓋骨片・上腕骨片・その他数片	頭蓋骨片・上腕骨片・その他数片	頭蓋骨片・上腕骨片・その他数片	1号・頭・上腕・尺・脛・腰・膝など 2号・頭蓋・上腕・大腸	四肢骨が主で、頭骨はない。詳細は不明	?	頭骨・長管骨・寛骨・椎骨・肋骨	?	頭骨・四肢骨以外不明	頭骨・尺骨・椎骨・大腸骨・脛骨・肋骨・椎骨	?	?	頭骨・四肢骨。他は不明	頭骨・肩甲骨・寛骨・上下肢骨	頭骨・四肢骨	
1号	2C型	八体	2C型	2C型		446号	3体	2C型	309号	2C・4						
1号は人為的に破砕された頭骨片を長管骨が取り囲む。2号の頭骨も人為的に破砕	1号は人為的に破砕された頭骨片を長管骨が取り囲む。2号の頭骨も人為的に破砕	1号は人為的に破砕された頭骨片を長管骨が取り囲む。2号の頭骨も人為的に破砕	1号は人為的に破砕された頭骨片を長管骨が取り囲む。2号の頭骨も人為的に破砕	1号は人為的に破砕された頭骨片を長管骨が取り囲む。2号の頭骨も人為的に破砕	長管骨を台形状に二連組み、頭骨や肋骨などの小骨を詰める	人骨の不規則な集積	長管骨を台形状に二連組み、頭骨や肋骨などの小骨を詰める	四肢骨は不規則に集積	四肢骨は不規則に集積	長管骨を四角に組み、四隅に頭蓋骨を割置く。中に肋骨や椎骨を詰める	不規則な集積	不規則な集積	頭蓋骨を二分して四肢骨の両側に置く	人骨を束状にしている	腰數個を土坑の周囲に配置している	
晩期初頭	晩期初頭	晩期初頭	晩期初頭	晩期初頭	晩期	後・晩期	晩期	後・晩期	後・晩期	晩期	後・晩期	後・晩期	後・晩期	晩期	晩期	
春成はか一九八八					中山はか一九五二	清野一九六九	清野一九四三		清野一九六九	清野一九四三		清野一九六九			出口はか一九九二	

58			57			56		55	54	53						
3	2	1	3	2	1	2	1			2	1	10	9	8	7	6
"	骨墓 " 103号土 器棺再葬?	骨墓 " 236号集 少人数集骨葬	滋賀県大津市綿織穴 太・滋賀里遺跡31号集 骨墓 " 3号土器棺 土器棺再葬	" " 7号ピット 焼骨葬	愛知県一宮市・馬見塚 遺跡F地点5号ピット 焼骨葬	" " 土器棺 土器棺再葬	愛知県刈谷市天王町・ 本刈谷貝塚N06人骨 盤状集骨葬	愛知県刈谷市・宮東第 一号貝塚 盤状集骨葬	愛知県西尾市寺津町巨 海町・枯木宮貝塚1号 人骨 盤状集骨葬	" " B 盤状集骨葬	愛知県渥美郡渥美町・ 保美貝塚A 盤状集骨葬	" " 23号人骨 一次葬?	" " 22号人骨 一次葬?	" " 21号人骨 一次葬?	" " 18号人骨 一次葬?	" " 12号人骨群 少人数集骨葬
土坑・土器棺	土坑(一三〇×九〇cm)	凹形土坑(六〇×四〇cm)	土坑・土器棺	土坑(直径九〇cm)	楕円形土坑(一三〇×一一〇cm)	?	長方形土坑(五二×四六cm)	楕円形土坑(一三〇×九〇cm)	?	?	土坑	土坑	土坑	長方形の浅い土坑	隅九方形土坑(七〇×七〇cm)	
一体	数体	一体?	?	数体分	?	?	一体	三体	一体	七体	六体	一体	一体	一体	一体	二体
							6号		1号			23号	22号	21号	18号	No1号・2号
?	?	?	?	?	?	?	男性	?	?	?	?	?	?	?	?	男性一・1号、 女性一・2号
乳児	?	?	?	未成年	?	成人	壮年	?	(満) 幼児(五歳未)	?	?	熟年	熟年	熟年	熟年	老年一・1号、 老年一・2号
頭蓋骨・上腕骨	頭蓋骨以外の骨、 他は詳細不明	頭蓋骨・その他の骨と いう以外、詳細は不明	?	頭骨・大腿骨・肋骨な ど数百片以上	?	頭骨の他にもあるが不明	頭骨・上腕骨・大腿骨 の他は不明	頭骨・四肢骨・その他。 詳細は不明	頭骨・椎骨・肋骨・肩 甲骨・上腕骨・尺骨・ 腕骨・大腿骨・脛骨・ 腓骨	四肢骨・その他。詳細 不明	頭骨・四肢骨・その他。 詳細不明	上腕骨・大腿骨・左右 脛骨	指骨一点	指骨三点	右尺骨・腕骨・手骨	1号・頭・上腕・腕・ 尺・大腿・脛・腓など、 2号・頭・上腕・尺・ 大腿・脛など
			焼けている	焼けている	焼けている											
																2C型・ 2号、不 明抜歯・ 1号
土器棺はほぼ垂直に埋	頭蓋骨以外の骨が二つ のブロックに分かれて 数体分集積されている	頭蓋骨を上に置き、下 りに他の骨を集積。未塗 りの土製品を伴う	内部の人骨は二〇片で 小骨片	焼入骨は故意に砕かれ たように細片化してい る。木炭片若干が共伴 横転した合口土器棺。	土坑に焼土はない。土 坑の肩に二号土器棺が 横転	頭蓋骨を直立させ、下 方に他の骨を束ねる。	頭蓋骨を四角形につく り、隙間に他の骨を詰 める。頭蓋骨は割って いる。	四肢骨をほぼ方形に組 み、その中に頭骨や小 形の骨を詰めている	長管骨を四辺に並べ、 四肢に頭蓋骨を配し、 中に他の骨を詰める。 椎骨は関節したまま	四肢骨を六角形に組ん で、その中に頭蓋骨や その他の骨を入れる	四肢骨を多角形に組み 、その骨を入れる	再葬の取り残しとされ る	再葬の取り残しとされ る。貝輪五片伴出	再葬の取り残しとされ る	右腕の骨は解剖学的な 正位置にあり、再葬の 取り残しとされる	屈葬状態で再葬。2号 は解剖学的正位置か? ?
晩期前葉	晩期	後・晩期	晩期終末	晩期後葉	晩期後葉	晩期	晩期前葉	晩期前葉	晩期初頭	晩期前葉	晩期前葉	晩期初頭	晩期初頭	晩期初頭	?	晩期初頭
	加藤ほか一九七三			澄田ほか一九七〇			谷沢ほか一九七二	加藤一九六八	牧ほか一九七三							久永ほか一九七五

縄文時代の再葬

67	66		65	64		63	62	61	60		59					
	2	1		2	1				2	1	2	1	5	4		
愛媛県上浮穴郡美川村・上黒岩岩陰	"	山口県下関市富任町・神田遺跡	広島県比婆郡東城町・猿神岩陰墓坑B	骨群 " 第2号埋蔵人	骨群 " 第2号埋蔵人	岡山県児島郡瀬崎町・彦崎貝塚	奈良県吉野郡中庄村・宮滝遺構	奈良県橿原市祇傍町・橿原遺跡	2号	大阪府東大阪市箱殿町・鬼塚遺跡1号	"	大阪府東大阪市日下町・日下遺跡土坑	坑塚棺再葬	坑塚棺再葬	坑塚棺再葬	坑塚棺再葬
少人数集骨葬	土器棺再葬?	少人数集骨葬	少人数集骨葬	多人数集骨葬	多人数集骨葬	焼骨葬	焼骨葬	焼人骨を含む散乱骨	焼骨葬	焼骨葬	一次葬?	少人数集骨葬	土器棺再葬	土器棺再葬?	土器棺再葬?	土器棺再葬?
凹形土坑(径約五五cm)	土器棺	凹形土坑(径一m)	土坑(二一〇×八五cm)	?	?	凹形土坑(径三〇cm)	配石遺跡	?	方形土坑(一一〇×七〇cm以上)	横凹形土坑(二二〇×一四〇cm)	横凹形土坑(二七×六五cm)	不整形凹形土坑(二〇五×八〇cm)	土坑・土器棺	土坑・土器棺	土坑・土器棺	土坑・土器棺
三体	一体?	二体	四肢	二十体以上三十体近く	二十体以上	三体	?	二体以上	三体以上	五体以上	一体	一体	一体	一体	一体	一体
69001号・69002号・69003号						1号・2号・3号					III号	III号				
903号	男性・6901号・6902号・6903号	男性・不明	?	?	?	?	?	男性とされるが、二体とも男性か不明	?	?	男性	女性?	男性	?		
69003号	1号・69002号・幼児・69003号	幼児・男性	成人・小児	幼児など若年者が多く、高齢者は三十四体	幼児など若年者が多く、高齢者は三十四体	小児・一・二・若年・高・高齢者が多く	?	成年	体以上	子供・一・二・三・成人・三・体以上	成人	成人	幼年	幼児		
の全身骨	頭骨・椎骨・胸骨・肋骨・肩甲骨・長管骨・寛骨・手足骨など	長管骨一片	頭蓋骨・下顎骨・寛骨・大風骨など	頭骨・四肢骨・寛骨などであるが、詳細は不明	頭骨・四肢骨・肋骨・細骨など	頭骨・指骨・足骨など	?	頭骨・上腕骨・寛骨・大腿骨など	?	?	頭蓋骨・肩甲骨・鎖骨・尺骨・手骨・肋骨・寛骨・大腿骨・脛骨・腓骨・足骨	頭蓋骨・肩甲骨・鎖骨・上腕骨・尺骨・手骨・肋骨・寛骨・大腿骨・脛骨・腓骨・足骨	頭蓋骨	頭蓋骨・大腿骨		
						焼けている	焼けている	焼人骨を含む	焼人骨を含む	焼人骨を含む						
						型0・2C										
束ねられたような状態	頭骨・短骨・偏平骨・長管骨の順に積み重ねられている。長管骨は束ねられたような状態	二体分の人骨は重なって出土	骨の一部が、重なった墓坑Cから出土した頭骨片と接合。サルボウ製貝輪伴出	幼児の頭骨は縫合で割られ、そこに全身骨を合わせ、再び頭骨を合せている	頭骨を平円に集積し、西側に他の骨を集積	頭骨を三個、凹状に埋置している	人骨は細片、石鏃、獣骨・木炭が伴	人骨は散乱状態、付近に炉址がある	長管骨を意図してまとめた状態。詳細は不明	長管骨を意図してまとめた状態。詳細は不明	頭骨などは取り出され存在しない。頭骨があった場所に際を置く	二次的に掘り返され、頭骨などは取り出され存在しない。頭骨があった場所に際を置く	四肢骨は束ねたような状態で集積、長骨の間に石が置かれている	土器棺は土坑に斜に埋設されている	土器棺は土坑に斜に埋設されている	土器棺は土坑に斜に埋設されている
早期中葉	後期	後期	後期後半	後期後半	後期後半	前期	晩期	晩期	晩期後葉	晩期後葉	晩期中葉?	晩期前葉	晩期前葉	晩期前葉	晩期前葉	晩期前葉
森本はか一九七〇	一	富士禁はか一九七	川越一九七八	戸沢はか一九七六	池葉須一九七一	末水一九四四	末水はか一九六一	福水信雄教示		吉村はか一九八五						

80	79	78	77			76	75	74		73	72	71	70	69	68
			4	3	2			1	2						
大分県竹田市畜生・ギノ遺跡	大分県大野郡朝地町・大恩寺稲荷岩除四号	川原田洞穴	大分県遠見郡山香町・大分県遠見郡山香町・大分県大野郡朝地町・大恩寺稲荷岩除四号	大分県遠見郡山香町・大分県大野郡朝地町・大恩寺稲荷岩除四号	大分県大分市・横尾貝塚1号埋葬址	大分県玖珠郡九重町・二日市洞六2号埋葬遺跡	大分県下毛郡本耶馬溪町・粉洞六6号人骨	熊本県天草郡五和町・沖ノ原遺跡23号人骨	熊本県天草郡五和町・沖ノ原遺跡23号人骨	熊本県下益城郡城南町・阿高貝塚	熊本県菊池市天城・赤星遺跡	長崎県南高来郡国見町・後遺跡19号ヒット	長崎県下保市松瀬町・若下洞六Aトレンチ第V層	福岡県遠見郡齊屋町・山鹿貝塚214号人骨	福岡県京都郡若り田町・津上院遺跡
土器棺再葬?	抱足葬	集骨葬	少人数集骨葬	少人数集骨葬	少人数集骨葬	少人数集骨葬	少人数集骨葬	少人数集骨葬	少人数集骨葬	焼骨葬	焼骨葬?	少人数集骨葬	多人数集骨葬	一次葬	土器棺再葬
土器棺	?	?	長方形土坑(丸) ○×五〇cm	長方形土坑(七) ○×四〇cm	土坑	橋四形土坑(七) ○×五二cm	不整円形土坑(六) ○×五〇cm	?	?	?	土坑?	円形土坑(径三〇cm)	?		土器棺
一体?	?	?	四体	一体	二体	三体	一体	一体	一体	二体	?	一体?	二二体	二体	一体?
?	4号	?	8号 a・b・c・d	7号	2号	1号・2号・番号なし	6号	29号	23号				18号 5号 14号 16号	2号・3号	
?	?	?	?	?	?	男性一・1号 女性一・2号 不明一	?	女性	男性	一女性一・不明	?	?	16号・不明三 9号 11号 13号 女性四・5・8・9・12	女性二	女性
少年(一〇歳)	?	?	成人三・8 小児一・8 a・b・c	成人	成人	成年一・1号 小児一・2号	?	成人	成人	成人一・女性 小児一	?	成人	12号・13号・小児 14号	成人	成人
白衛三本	距骨以下の足の骨が肋骨の中から検出	?	頭骨・肋骨・椎骨・四肢骨・寛骨などであるが、詳細は不明	頭骨・四股骨・肋骨・椎骨・寛骨	頭骨・四股骨という以外に詳細は不明	頭骨・肋骨・四股骨など図面から判断できるが、詳細は不明	頭骨・四股骨	?	?	頭蓋骨・肋骨・椎骨・上腕骨・寛骨・大腿骨など、詳細は不明	?	大腿骨	み残り、他は一部骨のみ残存	全身骨だが、2号は鎖骨・胸骨・肋骨を、3号は鎖骨・肩甲骨・胸骨・肋骨と椎骨を欠く	頭蓋骨・鎖骨・肩甲骨・肋骨など
										焼けている					焼けている
										型式不明					
直立つ土器棺、屈葬の可能性あり、再葬か否か不明	再葬ではない?	屈葬を模した集骨といふ以外、詳細は不明、足切断の時点は不明、再葬ではない?	aは寛骨・四股骨の上に頭骨を置く。b・cは四股骨を三角形に組み、上に頭骨を置く	四股骨を束ねる。その上に頭骨を束ねている	四股骨を束ねる。その上に頭骨を束ねている	下に小児骨を再葬し、上に成人の四股骨を束ねる。小児骨の上半身は関節で接合か?	四股骨が下に、頭骨が上に堆積	二次埋葬とされるが、詳細は不明	二次埋葬とされるが、詳細は不明	軟部組織が消失した後焼かれたもの	詳細は不明。焼骨片が散在する。火葬場的施設とされる	貝殻、十字形石器と共伴	単葬によって破壊されたものが集められて改葬状態にあるものもあるのて、すべて再葬とはいえない	4号(乳孔)の二体合葬。2号人骨の寛骨などが3号人骨の足元に置かれている	土器棺は斜に埋設されている
晩期	前期	早期中葉	前期中期	前期中期	前期中期	早期中葉	後期	後期	後期	中期?	後期後葉	後・晩期	早期中葉	後期	後期後葉
鏡山一九五三	賀川一九六七	賀川一九六七	高橋ほか一九八二	高橋ほか一九八二	高橋ほか一九八二	橋一九八〇	賀川ほか一九七七	隈ほか一九八四	隈ほか一九八四	清野一九二二	鎌見ほか一九七六	吉田ほか一九七四	麻生ほか一九六八	水井ほか一九七二	小田ほか一九七二

えて、散乱骨とある部分の骨を欠いた埋葬人骨の例をここでとりあげる。散乱骨や、部分欠失人骨の成因は様々であり、たとえば獣による攪乱、何らかの原因で部分的に骨の消失が進んだものなど、再葬に伴う行為の結果との識別が問題であるが、ここでは明らかに人為的な結果によるものをとりあげる。この識別作業は、調査現場での精査がものをいう。

#### 少人数集骨葬

すでに述べたように、集骨葬は縄文早期中葉にさかのぼる可能性がある、もっとも基本的な再葬のありかたである。骨の残存条件を反映して、こうした事例は洞穴遺跡や貝塚地帯に多くみられる。

宮城県田柄遺跡の4号土坑は、壮年二体と乳児二体の少人数集骨葬である。乳児の一体は単葬であるが、もう一体は頭骨だけである。墓坑底面には成人男性骨の一部を埋葬しているが、二体とも骨盤と大腿骨だけは解剖学的な正位置を保っている。つまり、軟部組織が遊離する前に、なんらかの理由でこの部分だけ埋置したのである。その上に残りの骨をつめている。縄文後期前葉とされる〔阿部ほか一九八二〕。

福島県三貫地遺跡からは、一九五二年の発掘調査により五〇体以上の人骨が発掘された。屈葬・伸展葬などの単葬人骨に混じって、二基の多人数集骨が検出されたが、それを取り巻くようにして二つの円形の埋葬グループが形成されている(図1-1)。集骨を含んだ合葬人骨がそれぞれのグループから一例ずつ検出された。3号と6号は二体合葬である。6号は屈葬の単葬であるが、3号はそれと主軸を一致させた上半身の骨に、大腿骨などをそろえて乗せた少人数集骨葬である。3号は若年の男性、6号は壮年の女性である。8・9・12・13号は四体合葬である。大

腿骨、椎骨列がいずれの頭骨とも整合性をもたないことから、四体のうちのいずれかあるいは複数の再葬であるとされる。四体とも女性で、壮年二体と熟年二体である〔吉田一九六四、森ほか一九八八〕。三貫地遺跡の埋葬人骨の大部分は後期前葉の土器が圧倒的なⅢ層に包含されている。したがって多人数集骨は後期前葉に位置づけられると考えるも成り立つが、墓坑が伴うとすれば縄文後期末〜晩期のⅡ層を掘りこんで埋葬されたとみるのが自然であろう。

千葉県西広遺跡からは、縄文後・晩期の人骨が四一体検出されたが、そのうち38号は壮年の女性であり、小さな土坑に頭骨と長管骨が明らかに集積された状態で出土した。39号も壮年の女性であるが、浅い土坑に頭骨だけ埋葬し、浅鉢をかぶせたものである。いわゆる甕被葬の可能性も残る。いずれも縄文晩期である〔米田ほか一九七七〕。

一九八四年におこなわれた愛知県伊川津遺跡の調査では、二一基の墓坑と、四三体の埋葬人骨が検出された(図1-4)。埋葬には合葬例が九例認められたが、そのうちの五例が再葬だった。うちわけは、二体合葬(再葬)三例、三体合葬(再葬)一例、一三体合葬(再葬)一例であり、二体合葬のひとつと三体合葬例は盤状集骨葬であった。4号墓は老年の女性と六歳前後の幼児の少人数集骨葬である。12号墓は老年の男性と熟年の女性の少人数集骨葬である。伊川津遺跡の埋葬は、縄文晩期初頭から前葉の三時期にわたるが、再葬は晩期初頭のⅠ期に限られる〔春成ほか一九八八〕。

内陸部でもいくつかの少人数集骨例が知られている。青森県堀合Ⅲ号

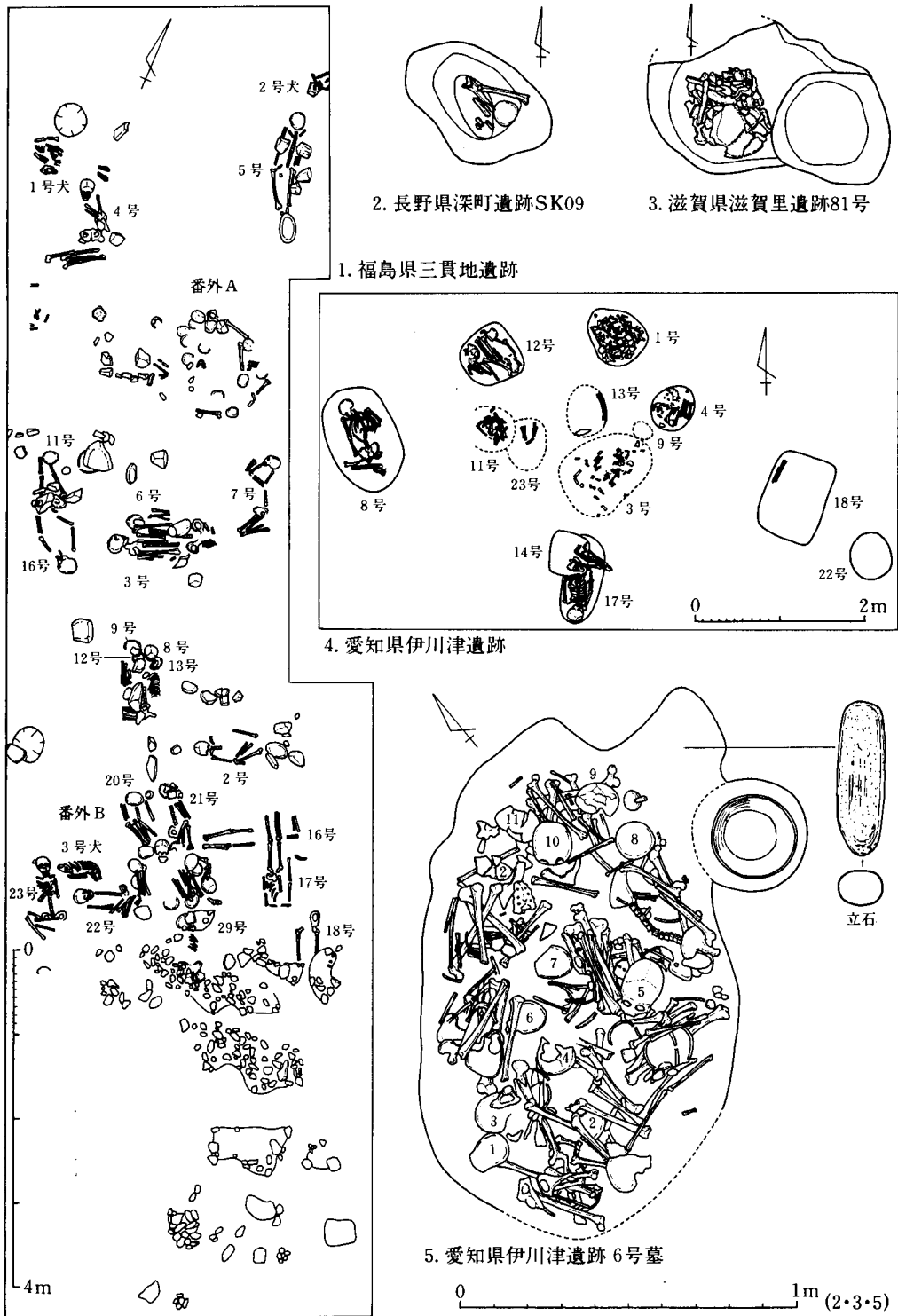


図1 縄文時代の再葬(1)



の1号石棺内には数体分の頭蓋骨や体肢骨が集積されていた〔葛西ほか一九七四〕。長野県深町遺跡では、一〇基の配石を伴う土坑が検出され、そのうちの五基に人骨が認められた。SK 01・09・12などは、その規模や出土状況から再葬と考えられる。このうち、SK 09は、又状に組んだ大腿骨に頭蓋骨をはさみ、上腕骨や小骨をまとめて置いている(図1-2)。この例も含めて、深町遺跡の骨は破損したものが多し。縄文後(8)の資料である〔林ほか一九七九〕。

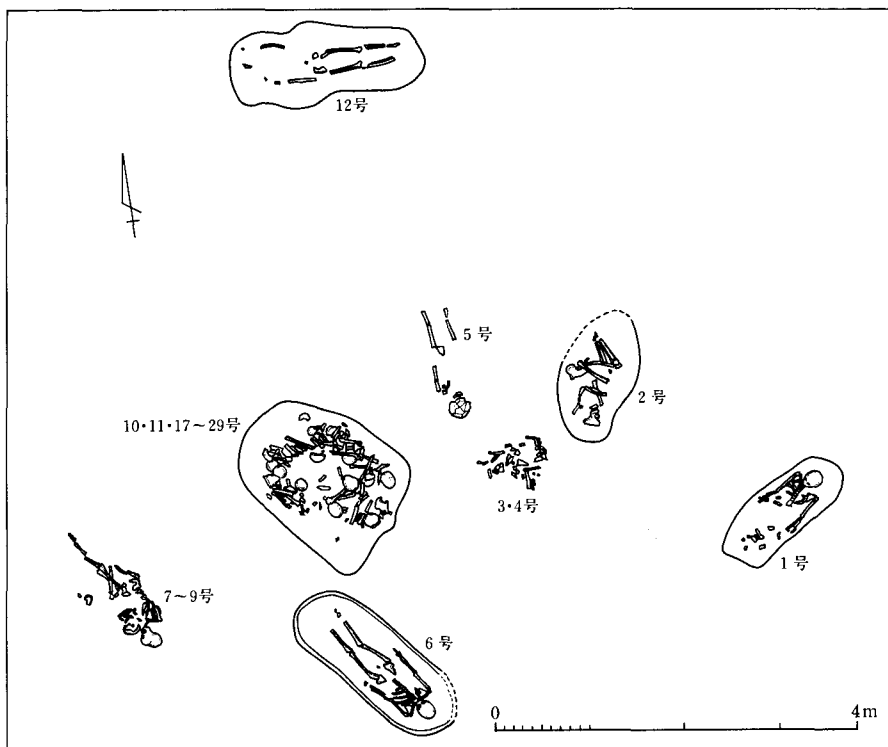
近畿地方では、滋賀県滋賀里遺跡で人骨を出土した土坑四四例のうち二例〔加藤ほか一九七三〕、大阪府鬼塚遺跡で二例のうち二例とも(8)、大阪府日下遺跡で二六例中一例〔吉村ほか一九八三・八五〕、集骨葬が報告されている。滋賀里81号例(図1-3)は性別や年齢の不明な数体分の少人数集骨葬で、土坑に四肢骨を集積し、その上に頭蓋骨を乗せている(9)。鬼塚例は大人三体以上小人二体以上が一例と、大人二体以上小人一体以上が一例であり、長管骨がまとめられ焼骨を含んでいる。日下例は成人女性一体分の少人数集骨葬である。これらは土坑の中に集骨したものであり、近畿地方の諸例はいずれも縄文晩期で、鬼塚例は晩期後葉(終末)である。

**多人数集骨葬** 下総台地の縄文後期の貝塚には、単葬に混じって多人数集骨葬が広がりを見せる。千葉県権現原遺跡〔花輪ほか一九八七〕では一七体の人骨をひとつの土坑に埋葬した多人数集骨葬が、祇園原遺跡〔米田一九八〇、鷹野一九八三〕では五体以上のものが三基、古作遺跡〔岡崎ほか一九八三〕では一四体の多人数集骨葬が知られており、多人数

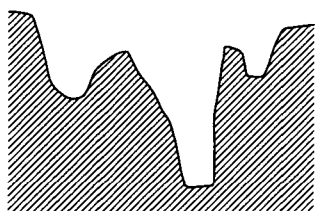
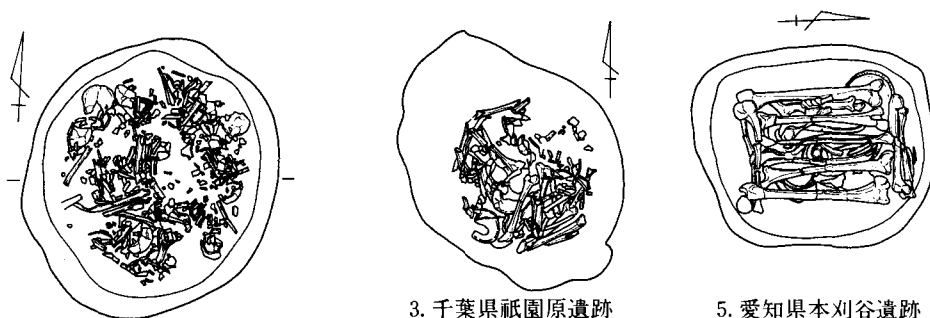
集骨を他の伸展葬人骨が取り巻いている(図2-1)。権現原例は成人が一四体と少年二体、小児一体で、男女はおよそ半々であり、古作例は壮年と熟年の男性九体と壮年の女性三体、幼児二体である。権現原例は円形の土坑の真ん中に深いピットがあり、人骨もその部分は柱状に抜けている(図2-2)。これらはいずれも縄文後期前(中葉、とくに堀之内I式)に集中する。縄文後期の多人数集骨葬は、広島県帝釈遺跡群寄倉岩陰にも認められる。これは成人骨を多く含む二二体以上のグループと、小児骨が中心の二〇体以上のグループの二群から成る〔戸沢ほか一九七六、河瀬一九八八〕。

三貫地遺跡の「番外A」とされた多人数集骨葬は、一四体分の頭骨を円形に並べたものである(図1-1)。青年(青年)熟年の男性三体、青年(壮年の女性)二体以外は不明である。「番外B」では九体分の頭骨を寄せ集めて円形に埋葬しており、頭骨の内側には数本を束にしたような状態の長管骨が二群認められる。青年(青年)熟年の男性四体、壮年の女性二体以外は不明である。時期は他の埋葬とほぼ同時期の縄文後期末(晩期前半)と考えられる。

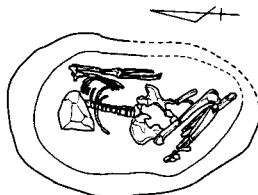
伊川津遺跡の一三三合葬である6号人骨群(図1-5)は、埋葬時には骨化していた四肢骨を束ねたようなもの、軟部の残っている状態で埋葬を意識して埋葬したもの、埋葬時に腐乱が進行している例、していない例、焼けた幼児骨片などからなり、明らかに再葬と考えられる個体を含んでいる。これらは、老年女性一体、熟年女性八体、熟年男性一体、性別不明老年一体、幼児二体で構成されている。縄文晩期初頭。



1. 千葉県古作遺跡



2. 千葉県権現原遺跡 P65



4. 大阪府日下遺跡土坑墓Ⅲ



6. 愛知県枯木宮遺跡

0 100cm (2-4)

0 40cm (5-6)

図2 縄文時代の再葬(2)

**盤状集骨葬** 三河地方では、大腿骨などの長い骨を四角に組んで、

その中や隅に、頭骨やその他の骨を割ったりして詰め込んだ特殊な葬法が、古くから知られていた〔清野 一九二五〕。人骨の盤状集積、すなわち盤状集骨葬である。上敷領久の集成〔上敷領 一九八七〕に新たな知見を加えると、三河湾周辺で六遺跡一一例が確認できる。このうち吉胡例が四体〔清野 一九四六〕、保美の二例がそれぞれ六体と七体〔久永ほか 一九七五〕、宮東例が三体、伊川津の二例が二体と三体〔春成ほか 一九八八〕の合葬であった。性別と年齢がはっきりしているものは四例あるが、吉胡と本刈谷例（図2―5）はいずれも男性で、伊川津例は1号が男性二体と女性一体で、11号が男女一体ずつである。年齢は壮年から老年までわたるが、小児も枯木宮に一例（図2―6）みられる。伊川津1号・枯木宮例〔牧ほか 一九七三〕・本刈谷例〔谷沢ほか 一九七二〕は、頭蓋骨が割り置かれている。これらは時期不詳のものもあるが、おおむね縄文晩期前葉である。

**散乱骨と部分骨欠失人骨** 青森県畑合I号遺跡の一二基の石棺墓の

うち、四基から成人骨が〔葛西 一九七四・八三〕、前出のIII号遺跡の二基から成人骨が出土した。その多くは腕や脚などの部分骨で散乱状態である。青森県山野峠遺跡からも同様の石棺が検出されており〔喜田 一九三四・江坂 一九六七・葛西 一九八三〕、これらの遺跡には後述の再葬甕棺が伴う。いずれも縄文後期初頭く前葉である。長野県宮崎遺跡の石棺墓二基からも二次的に移動した人骨が出土した。8号石棺墓からは二体の人骨が出土したが、散乱状態にちかい。性別、年齢は不明。縄文後期中く

後葉である〔矢口ほか 一九八八〕。

伊川津遺跡の一九八四年の調査では、いくつかの集骨葬とともにわずかな人骨しか出土しない土坑や、散乱した部分骨を含む土坑が九基検出された。その多くは、集骨葬の土坑の内側に弧状に並ぶ配列をとる（図1―4）。清野謙次の吉胡遺跡や愛知県稲荷山遺跡の報告〔清野 一九六九〕にも、集骨葬に混じって「散乱骨」という記載が散見される。

近畿地方では、日下遺跡において解剖学的な正位置を保った成人男性の屈葬人骨と散乱状態の成人女性の人骨が土坑から出土した。ともに土坑には掘りかえした跡があるとされ、人骨は頭蓋骨と下顎骨を欠いていた。土坑墓Xには頭骨のあった場所に、それに見合う大きさの礫を置いている（図2―4）。これらは晩期である〔吉村ほか 一九八五〕。福岡県山鹿遺跡の三体合葬例は、2号人骨の寛骨などが取り出されて3号人骨の足元に置かれていた。縄文後期中葉である〔永井ほか 一九七二〕。

## （二）土器棺再葬の諸例

縄文後期初頭く前葉の十腰内I式に、青森県を中心として再葬甕棺墓が発達した〔笠井 一九一八、葛西 一九七四・八三〕。これは、大形の壺にちかい特徴的な形の土器を棺とし、その中に再葬人骨を納めて、土坑や石槨状の遺構に埋納したものである。青森県鷹架遺跡〔遠藤ほか 一九八一〕や、薬師前遺跡〔市川 一九七九・森本 一九八八〕では一つの土坑に三個体の土器棺を納めていた（図3―1）。

これら再葬甕棺の中に人骨が残存していたのは一一遺跡ある。このう

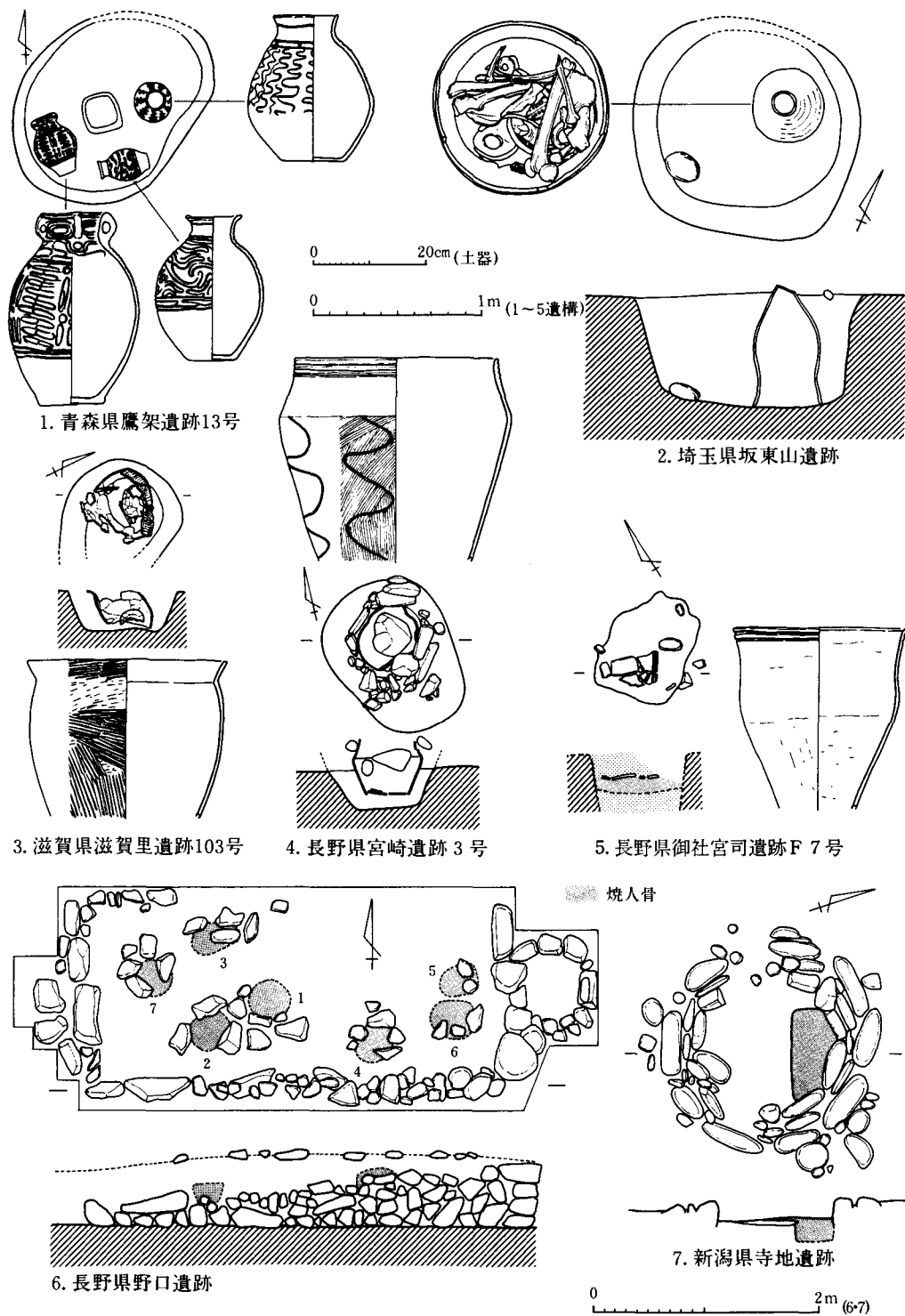


図3 縄文時代の再葬(3)

ち主要な例をまとめた森本岩太郎によると、堀合I号遺跡からは成人男性、表館遺跡からは一八〜一九歳の女性一体分、月見野遺跡からは、壮年男性一体分、下平遺跡からは、壮年女性一体分、薬師前遺跡では、第1号棺から壮年男性一体分、第2号棺からは性別不明の成人骨が、第3号棺からは壮年女性一体分の骨が出土している。表館例は、全身の骨を得られる限り棺に納めており、それ以外の例も頭骨や長管骨をはじめとして身体のいろいろな部位の骨が納められている場合が多い。多くは頭蓋骨が棺底付近にあり、堀合I号・表館・薬師前1・3号例は、上下肢の長骨を斜めにたてかけていた〔森本一九八八〕。

埼玉県坂東山遺跡で、同様な葬法が一例報告されている。土坑の底に熟年男性の頭蓋骨を置き、その上下肢骨・肋骨・上肢骨を積み上げ、底を欠いた深鉢を逆位にかぶせている(図3-2)。称名寺I式であり、青森県下の再葬甕棺墓のもっとも古いものと並行する時期である〔並木ほか一九七三〕。さらにこれを遡る中期後葉の加曾利E3式の土器棺再葬例が群馬県板倉遺跡にある。倒立土器棺という点では坂東山例と一致するが、板倉例は頭骨だけが出土しているようである。性別は不明で二二歳前後である〔外山ほか一九八九〕。縄文後期の土器棺再葬は、東日本においてはこれ以外管見には入っていない。つづく縄文晩期には、例数は少ないものの、比較的広範な地域で土器棺再葬墓がみられるようになる。

前述の長野県深町遺跡からは、一二基の埋設土器の三基から骨の出土が報じられた。そのうちの一基であるSKIP14の人骨は焼骨の可能性

があると考えられている。また、土器棺の掘り方の中に人骨を伴うものがあるが、人骨の年齢や性別などは明らかではない。これらは縄文後・晩期とされるものの、詳細は不明であり、焼人骨を含むとされるSKIP14の時期は不明である。長野県宮崎遺跡の3号埋甕(図3-4)は、底を打ち欠いた甕形土器を楕円形の土坑に直立に埋設したもので、埋甕の底には別個体の土器片を敷いている。土器中の埋土から骨片が、底部の土器片の下から、若年の成人下顎の歯列が検出された。土器片の下に下顎のみ埋葬したものと考えられる。土器の上半部は礫で囲まれており、中には大きな礫が落ち込んでいた。おそらく、蓋に利用したものである。時期は縄文晩期終末、水I式である〔矢口ほか一九八八〕。

愛知県本刈谷遺跡から、一九五二年に偶然発見された深鉢の中には、成人骨が納められていた。人骨の性別や年齢は報告されておらず、土器棺も晩期に属する無文土器ということ以外は不明である〔谷沢ほか一九七二〕。このほか、土器棺から焼人骨が出土する例があるが、これは次節で述べる。

滋賀県滋賀里遺跡から、再葬の可能性のある土器棺が出土している。縄文晩期の墓域であるIIIc区は、不確定のものも含めると、七八基の土坑墓と二五基の土器棺墓が群在しているが、報告者は成人男性の頭蓋骨の入ったI72号土器棺、ならびに乳児・幼児の頭蓋骨と上腕骨を納めた103・171号土器棺に「洗骨」の可能性を指摘している(図3-3)。いずれも滋賀里IIIb式の甕形土器を用いている〔加藤ほか一九七三〕。

## (三) 焼人骨葬の諸例

縄文時代にも、火葬に類する葬法が存在した。これを焼人骨葬としておく。石川日出志は、縄文・弥生時代の焼人骨を三二例集成し、検討を加えた〔石川一九八八〕。石川は焼人骨の再葬法を、その埋葬施設によって五群に分類したが、それは、a群Ⅱ各種配石遺構に伴う一群（縄文中期後葉～晚期中葉、中部高地・新潟県西部に分布）、b群Ⅱ墓坑内に直接焼人骨を納めた一群（縄文後期～晚期後葉、中部高地・近畿地方に分布）、c群Ⅱ壺棺内、もしくはこれに関係する一群（弥生前期～中期前半、愛知県から福島県までの広い地域に分布）、d群Ⅱ岩陰や洞窟を墓地とした例（弥生前期～中期後半、長野・群馬県に分布）、e群Ⅱ方形周溝墓、土坑墓に伴う例（弥生後期、長野・群馬県に分布）である。詳細はそれに譲るとして、ここでは縄文晩期のa～c群について概観しておく。

焼人骨葬は、中部高地の縄文中期後葉にさかのぼって認められる。晩期にいたって事例は増加し、その分布も新潟県一例・山梨県二例・長野県五例・愛知県二例・奈良県二例・大阪府一例というように格段と広がる。新潟県寺地遺跡〔関ほか一九八七〕・山梨県金生遺跡〔新津ほか一九八九〕・上条遺跡〔大山ほか一九四二〕・長野県野口遺跡〔林ほか一九六二〕・大明神遺跡〔樋口一九六七、新谷ほか一九八八〕・奈良県宮滝遺跡〔末永一九四四〕の焼人骨が配石遺構に伴うa群である。

a群に属する寺地遺跡例は、敷石状配石遺構が取り巻く中心に、炉状

配石があり、その中に最少一一体もの焼人骨が堆積していた〔図3-7〕。金生遺跡は一体分の頭骨、四肢骨の焼骨片が配石に伴う石棺状石組から出土した。野口遺跡例は、四・二×二・五メートルの石柳状遺構のなかに七基の配石が設けられている〔図3-6〕。配石の下からは二～三体の焼人骨が検出されており、最少個体数は三一体にのぼる。また、一部が盤状集骨状になっていたという指摘もある。大明神遺跡では、配石の間に故意に砕かれたような焼人骨が一三体分、層をなして堆積していた。宮滝遺跡の配石は、小規模かつ簡略化されたものである。これら配石遺構出土の焼人骨には、焼けた獣骨を伴う例が多い。縄文中期の長野県幅田遺跡〔金子ほか一九六五〕・梨久保遺跡〔会田ほか一九八六〕、晩期の寺地遺跡・深町遺跡・大明神遺跡などで、ヒトの焼骨とともにシカやイノシシなどの焼獣骨が認められるが、それらは細片化され時として破砕されている。これらは寺地・上条・野口・大明神・宮滝例が縄文晩期前～中葉で、金生が晩期後葉である。

b群は土坑に焼人骨を納める例であり、事例はそれほど多くはない。長野県御社宮司遺跡例〔図3-5〕は縄文晩期終末であり、一体分の焼人骨に氷I式の土器片をかぶせていた〔百瀬ほか一九八二〕。大阪府鬼塚遺跡例は二例とも焼人骨を含む焼人数集骨葬で、晩期後葉である。東北地方でも、後・晩期の再葬による焼人骨例がいくつか知られている。岩手県八天遺跡からは多数の土坑が検出されているが、そのうちの二基から、それぞれ男女各一体の成人二体、成人二体と未成年一体の三體以上の焼人骨が出土した。それらは骨の部位に偏りがあり、選骨して埋葬さ

れたものである〔林ほか一九八九〕。また、萩内遺跡からも、多数の土坑のうちの一基に、焼人骨が認められた。これはあらゆる年令の人骨が、少なくとも一三体集積されたものである〔野坂ほか一九八二〕。八天は縄文後期、萩内は後期ないし晩期である。

c 群の土器棺に焼人骨を納めた例は、福岡県浄土院遺跡に一例〔小田ほか一九七二〕、山梨県と愛知県に一例、長野県に二例ある。山梨県川又、長野県北村例は後期前中葉、長野県深町例は後々晩期である。一九六三年におこなわれた愛知県馬見塚遺跡F地点の発掘では五基の土器棺が出土した。このうち3号土器棺からは未成人骨であるが、焼人骨が二〇片出土している。縄文晩期終末の馬見塚式で合口の深鉢である〔澄田ほか一九七〇〕。

### 三 縄文晩期再葬の地域色

縄文時代の再葬を、後・晩期を中心に瞥見してきた。壺棺再葬墓出現以前の縄文後・晩期の再葬は、基本的には単葬にまじって、それに付随するような葬法として存在するが、なかには制度的に発達したものもある。弥生時代の再葬との関連性を考えるうえで重要なのは、いうまでもなく縄文晩期の再葬である。ことに、信濃地方と伊勢湾地方、近畿地方においては、集骨葬、土器棺再葬、焼人骨葬など、多様な再葬の形態が分布しており、多様性の意味するところが問題となる。また、南奥の福島県も弥生時代の壺棺再葬の成立を考えるうえで、欠かすことのできな

い地域である。これら各地の再葬の特色を整理し、地方間の再葬法の相互関係を推察し、縄文晩期の再葬を中心にその地域色を抽出したい。

#### (一) 中部高地地方

信濃・甲斐の中部高地における縄文晩期の再葬は、焼人骨葬が特徴的である。もっとも古い焼人骨葬である、縄文中期後葉の長野県幅田例は、配石遺構に伴っており、焼人骨葬の風習が、配石遺構をめぐる儀礼的なことから生まれてきたことをもがたっている。焼けた人骨を納めた施設は火を受けていない場合が目立ち、遺体・遺骸を焼いた場所と、その焼人骨を納めた墓とが別の場所であると考えられるものが多い。寺地遺跡の配石遺構と焼人骨が堆積した炉状遺構のありかたは、これら諸施設の一体性を示すものであろうし、野口遺跡は焼人骨の再埋葬が完結した姿を示すものであろう。春成は、前者を火葬の場、後者を埋葬の場とした〔春成ほか一九八八〕。焼人骨葬はこのように火葬と埋葬という二度の葬儀を経たものである。再葬は、遺体を骨にして再び葬るといふ二重の手続きをとる性格をもつことから、焼人骨葬も再葬の一種と認められる<sup>(12)</sup>。

中部高地は内陸であり、三河地方の貝塚地帯に比べて骨の残りは著しく悪い。そうした悪条件下で焼人骨葬だけではなく、集骨葬もいくつかく認められるのは、本来もっと多くの再葬がこの地方でおこなわれていた可能性を考えさせる。深町遺跡の集骨には破損したものが多かったが、これが再葬の際の人為的な破壊か否か検討する必要がある。この遺跡や野口遺跡の焼人骨には三河地方の盤状集骨葬と関連する可能性が指摘さ

れている集骨も存在しており、焼人骨葬には遺骨を破壊する性格があることを考慮すると、人骨を故意に破壊する盤状集骨葬とのかかわりが問題になるからである。

深町遺跡や宮崎遺跡のように、土器棺再葬が認められるのも弥生時代の壺棺再葬へのつながりを考えるうえで重要である。そのうちの宮崎遺跡では、縄文晩期終末の土器棺に部分骨を再葬していた点に注目しておきたい。

## (一) 伊勢湾地方

伊勢湾地方にも多様な再葬の形態がみられるが、その特徴は盤状集骨葬や多人数集骨を含む各種の集骨葬である。盤状集骨葬は、三河地方で発達した極めて特殊な再葬法である。これが偶然の改葬か、意識的な再葬かという点に関しては議論がある。<sup>(13)</sup> 石川日出志は、複数体の人骨からなる盤状集骨の場合、性や年齢のかたよりがみられるとし「石川一九八二」、上敷領久は、頭蓋骨や肋骨などが破碎されている点を重視する「上敷領一九八七」。ともに、この葬法が偶然の所産と考えられない証拠であろう。遺骸の破壊という点において、盤状集骨葬の特殊性は評価できるものであり、他の集骨葬と区別すべきだという上敷領の指摘は、その葬法の意味づけの<sup>(14)</sup>当否は別としても妥当である。また、盤状集骨葬は保美遺跡にみられるように多人数の遺骸を処理しているものがある点と、合葬例の多い点(表1)に特徴がある。

こうした貝塚地帯の大規模な墓域には、集骨とともにしばしば散乱骨、

あるいは土坑の中にわずかな骨しか検出できない例が伴うが、春成秀爾はそのうちのあるものは再葬の初葬(一次葬)の場であり、残余の骨はその取り残しである、という解釈をくだした「春成一九八八」。春成が指摘するように、伊川津遺跡の場合は一次葬と考えられる土坑が再葬土坑の内側に重複せずにまとまり、それらの場が一体となっていることが確認できる(図1-4)ので、上述の可能性は高いものといえる。

伊勢湾地方にも焼人骨葬が認められた。これらは配石遺構に伴うものではないが、類例の少なさからすれば、中部高地から伝播した葬法と考えておくのが妥当だろう。また、土器棺再葬も晩期中葉から終末にわずかではあるが出現するのは、中部高地や近畿地方とも連動する現象である。

## (二) 近畿地方

中村健二は、近畿地方における縄文晩期の墓制全般を論じたなかで、縄文晩期前々中葉の滋賀里Ⅲa・Ⅲb期の土器棺墓の発達を再葬と結びつける考えを示した。つまり、滋賀里遺跡から出土した再葬土器棺には頭蓋骨が納められていたのに対して、日下遺跡の部分骨欠失人骨に頭蓋骨を失ったものがあることに注目し、これらを有機的関連性のもとにとらえて、土器棺再葬墓が頭蓋骨を中心とした部分骨再葬と結びついて発達したと考えた。さらに、中村は滋賀里遺跡にみられた集骨を改葬墓と理解した「中村一九九二」。つまり、部分骨欠失人骨や散乱人骨は再葬の一次葬で、その再葬先が土器棺であり、集骨は新しい墓の造営の際、古



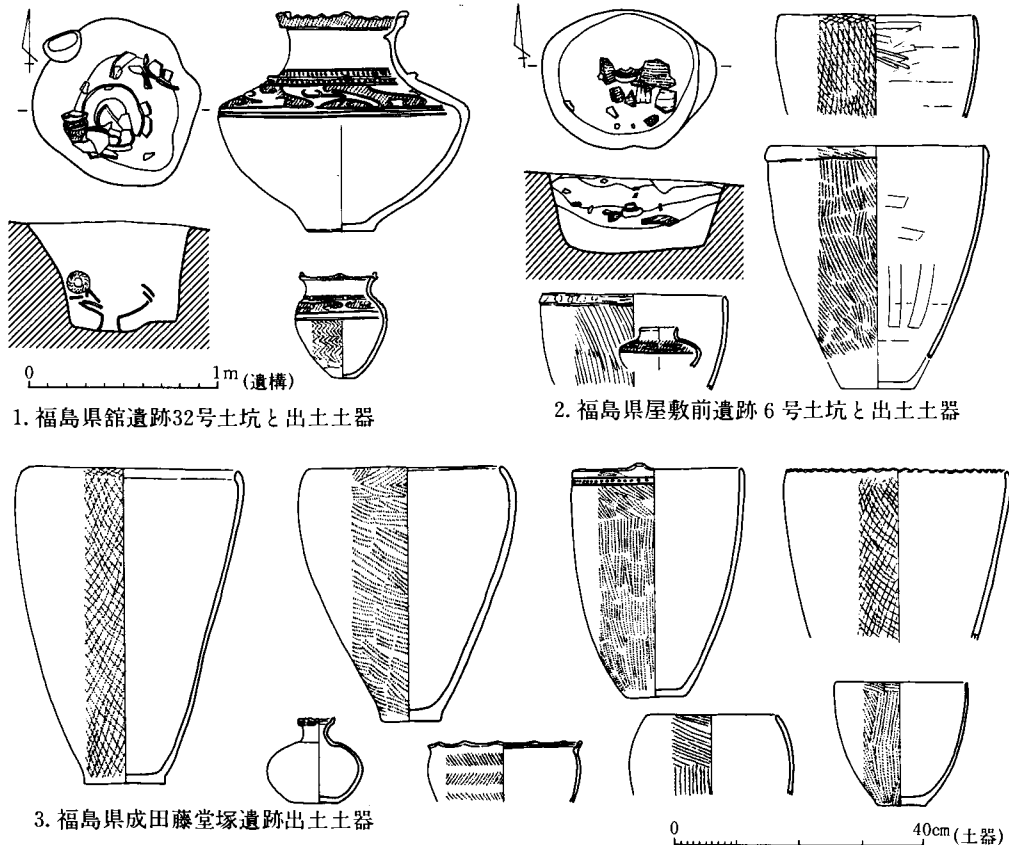
い埋葬に当たって出土した人骨を片付けた改葬であると秩序づけたのである。土器棺墓の発達は、吉胡遺跡のデータ〔清野一九六九〕を勘案すると、胎児・新生児・乳児の単葬など再葬以外の要素も考慮しなくてはならないし、集骨を改葬墓と結論することにについては、三河地方の集骨葬の影響なども考慮して判断すべきであろうが、きわめて魅力的な仮説である。これにより、近畿地方の縄文晩期にみられる多様な再葬の形態が整理されたといえよう。

一方、宮滝遺跡の焼人骨は、焼獣骨とともに配石遺構から出土した。榎原・宮滝例は細かい時期が不詳だが、その配石は貧弱であることから、明らかに中部高地や北陸地方の焼人骨葬の影響を受けて成立したものといえよう。

#### 四 南奥地方

縄文晩期前葉に、福島県で多人数集骨葬が出現する。これ以外に東北地方では焼人骨葬や集骨葬がいくつか報告されているが、これらは単発的であり、その系統に関しては明瞭さを欠く。一方、弥生時代の壺棺再葬墓の出現を論じるうえで検討しなくてはならないのは、大竹憲治が注目する埋設土器である〔大竹一九九二〕。大竹の論文にもとづいて、これに若干論及しておくたい。

福島県下で縄文後く晩期の深鉢形土器が群在して埋設される



1. 福島県館遺跡32号土坑と出土土器

2. 福島県屋敷前遺跡6号土坑と出土土器

3. 福島県成田藤堂塚遺跡出土土器

図4 縄文晩期の土器埋設土坑と出土土器

例はいくつか報告されている。山内幹夫はこれが弥生時代の壺棺再葬墓へと変化していくことを予察した〔山内ほか一九八五〕が、これらはたとえば道平遺跡のように〔大竹ほか一九八三〕、ひとつの土坑にひとつの土器を埋設することを基本として、掘り方は土器ぎりぎりに掘られる縄文時代通有の埋甕と変わるところはなく、ひとつの土坑に複数の土器を埋設する弥生時代の壺棺再葬墓との間には隔たりがある。また、内容物も獣骨や新生児、小児骨が今のところすべてである。ところが大洞C<sub>2</sub>式には、ひとつの土坑から複数の土器が出土する例や、大形壺を埋設した例が報告されている。

屋敷前遺跡6号土坑(図4-12)は円形の土坑に三個体の深鉢と一個体の小形壺を入れたものである〔猪狩一九八八〕。それらは完形品ではなく大形破片であり、土坑の中層に堆積したものであるが、大竹が指摘するように実はこれが成田藤堂塚遺跡で杉原が発掘した小堅穴と同じ性格のものである可能性が高い。いずれの堅穴から出土した土器の組合せも、小形壺を一個体伴う数個体の深鉢形土器(図4-13)で、たんなる日常容器の廃棄土坑ではなさそうである〔大竹一九九二〕。さらに、館遺跡32号土坑(図4-11)からは、口縁がすばまった小形の甕形土器とともに、胴部を切り離して蓋とした大形壺が倒立して出土している〔大竹ほか一九八九〕。こちらは土坑の底に密着して据えられたものである。これらの土器から骨は出土していないが、土器棺再葬がおこなわれていなかったとは断言できない。

#### (四) 縄文晩期再葬の地域色

このようにみると、縄文晩期にはそれぞれの地方に固有の再葬法があることがわかる。顕著なものとしては中部高地の焼人骨葬であり、三河地方の盤状集骨に代表される集骨葬である。また、近畿地方には頭骨を重視した、部分骨の土器棺再葬がみられた。しかし、それぞれの再葬法は地方ごとに固定したのではなく、それぞれの地方でこれら多様な再葬が入り混じって展開しているのが実状である。

従来、縄文晩期の再葬は三河地方が重視されていたが、石川日出志も指摘するように、中部高地や近畿地方も大いに注目すべきだと考える。ことに中部高地の再葬は、他の地方へ強い影響を及ぼした。中部高地・北陸地方から伊勢湾・近畿地方には、焼いた人骨を埋葬したり散布したりする焼人骨葬が伝播した。その一方、三河地方からは信濃地方へ盤状集骨葬が影響を与えた可能性がある。土器棺再葬に関しては、縄文晩期中葉の近畿地方でシステマティックな土器棺再葬が指摘されている。近畿地方がその発信源としての役割を担っていた可能性があり、北陸地方の土器棺との関係においては近畿地方がその影響を及ぼした側であることが指摘されている〔中村一九九二〕。しかし、埋設土器の伝統は東日本にあり、またほぼ同時期の晩期中葉には三河地方でも土器棺が急増する点も見逃すわけにはいかない。ここではこの時期、土器埋設土坑が広く近畿・中部・北陸地方に普及する点に注目しておきたい。

縄文晩期に各地方で多様な再葬が展開するのは、ひとつには焼人骨葬

の波及など地域間の相互の交流にその要因が求められる。しかし、なぜそうした多様な再葬がひとつの地方で展開するのかという点になると、たとえば集骨葬と焼人骨葬とは葬法が異なるものであるから、地域間の相互交流だけで多様性を説明し尽くすことはできない。また、たとえ同じ葬法であっても内実は違うかもしれないので、再葬の細かな内容に立ち入って検討しなくてはならない。さらに、再葬のありかたや意味も不変のものではあり得ないはずであり、その歴史の変遷を明らかにする必要がある。そこで次に再葬の意義を探りつつ、縄文後・晩期における再葬法の特徴とその変遷を論じる。

#### 四 縄文後・晩期再葬の特徴と変遷

まず、再葬の事例にもとづき、合葬の形態をとる再葬に焦点をあて、その性別や年齢、抜歯型式を整理し、再葬の意味するところにふれる。つづいて再葬に際しての骨の扱いかた、すなわちいかなる部位の骨を再葬して、どのような処理をしているのか検討する。

##### (一) 合葬のための再葬

東北地方北部の土器棺再葬は、ひとつの棺に一体の人骨を納めることを原則とする。性別や年齢が判明している七例のうち、男性は四例で女性<sup>(15)</sup>は三例であり、いずれも若年以上の成人である。再葬土器棺墓には鷹架、薬師前、山野峠、天狗岱など、ひとつの土坑ないし石櫛状遺構に

二〜三個体の土器棺を納めた例が少なからずある。詳細が不明な山野峠では複数のうちのそれぞれ一個体の土器棺から骨が検出されているようであるが、鷹架、薬師前ともに複数の土器棺から骨が出土しているので、一棺一体の原則を適応すれば、これらを合葬の一形態とみなすことができよう。その際、薬師前例は男女の合葬であり、その関係が問題になる。

少人数集骨葬は一体分の集積以外に数体分の集積があるが、そのうち田柄、三貫地の二例、加曾利北、宮などに単葬と再葬の合葬例が報告されている。また、伊川津12号例は単葬と再葬の、あるいは腐敗の異なる再葬人骨の二体合葬であった。これらのうち、加曾利北例は成人男性二体と女性と少年の合葬であるが、田柄例は成人男性二体と小児と乳児の合葬で、三貫地の一例は成人女性四体の合葬であり、あきらかに性別にかたよりをみせる。多人数集骨葬でも伊川津例は成人女性八体に対して、男性二体とかたよりをみせ、抜歯型式が判明するもの八体はいずれも2C型であった。寄倉の多人数集骨は、年齢によって二群に分けていた。盤状集骨葬で個体数が判明しているのは九例あるが、そのうち六例が二体以上の合葬であり、高い比率を占める。性別が判明しているのは六例のうち三例にすぎないが、このなかの吉胡164号例は、四体とも男性で、抜歯型式が明らかかなもの三体は2C型である。盤状集骨で抜歯が判明しているのはこれを含めて六例あるが、いずれも2C型であり、伊川津例の多人数集骨の抜歯型式とともに注目に値しよう。<sup>(15)</sup>

このように合葬型式をとる集骨葬には、性別や年齢、抜歯型式など、個々にかたよるものが少なからずある。伊川津などの東海地方の晩期で

は、埋葬小群<sup>(16)</sup>の中に男女が混じり合うので、盤状集骨の性のかたよりがたんに墓域の改修による偶然の結果とは考えられないし、抜歯のかたよりもそれを補強するものである。春成秀爾は抜歯の分析などから、東海地方では夫婦を含む、異なる出自集団のものどししは合葬することを禁忌としていた可能性が高いとする〔春成一九八〇〕。これが正しいとすれば、埋葬小群成立以降の東海地方における合葬形態の再葬の要因は、生前の密接な血縁関係にもとづくものであったとみる事ができよう。東北地方の縄文晩期には、男女の性別によって地点を変えた埋葬がおこなわれる場合が多かった〔林一九七七、春成一九八〇〕ので、おそらく性別の原理を基軸に、なんらかの血縁的つながりによって合葬形態の再葬をおこなったと考えられる。また、寄倉では年齢によって埋葬小群が分けられており、津雲貝塚では幼小児の埋葬比率が低く〔清野一九六九〕、別に葬られている可能性が強い〔春成一九八〇〕ことを考慮すれば、年齢にもとづいた合葬の原理が再葬の要因として働いていたとみることもできよう。<sup>(17)</sup>

これらのことは、つまり生前のなんらかの血縁関係や、年齢に応じた社会構造などにそれが死後の世界においても重視されるほど重要なものがあつたことを示しているのにはかならない。一体だけの再葬にはまた別の説明が必要だが、埋葬小群成立以降の再葬の理由の一端は、血縁関係や社会組織のありかたを背景とした合葬にあったと考えたいのである。したがって、薬師前例には夫婦合葬という推論が下されているが、この時点まで男女別墓制がさかのぼるか不明であるものの、ただちに夫婦合

葬説に従うわけにはいかない。こうした血縁関係の有無などの判断は、歯冠計測値〔土肥ほか一九八六、田中ほか一九八八など〕などを用いた形質人類学的データの積み重ねと考古学の側との相互批判も必要であろう。一方、下総台地で発達した多人数集骨はそのほとんどが幼児から熟年までの男女からなり、性や年齢などのかたよりは認められず、集落のあらゆる構成員からなるようにみえる。こうした埋葬はしばしば墓域の改修にもなる先葬者のかたづけ、すなわち改葬であるとされるが、これは後期初頭～前葉の墓域成立以前〔林一九七七〕であり、個々の埋葬も密集しておらず、墓地改修にもなる改葬は考えがたいので再葬として理解する必要がある。そこで注目されるのは、春成も指摘するように廃屋墓からの変化としての再葬〔春成一九八〇〕であり、祇園原や宮本台の単葬の多人数集骨葬がその過渡的形態に相当しようか。

三貫地の多人数集骨も二例とも男女にかたよりはなく、B例は子供から熟年までの年齢階層からなる。さらに抜歯もO型と2C型が共存しており、これも集落のあらゆる構成員からなるといつてよい。この埋葬に對しては、林謙作が指摘するように、墓地の改修にもなる先葬者の改葬〔林一九七七〕とみる余地がある。この点に関しては、遺跡においてその可能性を探るべきであり何ともいえないが、改葬であるにしても重要なものは、多人数集骨を中心としてその回りに埋葬が展開している点である。林はそれら先葬者とその後の埋葬をおこなった人々とのつながりが、「集団の始祖、祖霊といった形でとらえられていた可能性」を考えさせる〔林一九七七〕とするが、後期中葉の秋田県大湯遺跡の環状列石と

基本的には同様の墓域構成をとる三貫地例は、同じく中心埋葬としての意識が感じられる古作遺跡の多人数集骨葬例などとともに、祖先や集落の始祖に対する意識の萌芽的な側面をもっており、それが再葬あるいは改葬のひとつの要因になっているのではあるまいか。縄文晩期の東北地方ではすでに父系的な親族組織に到達していたという意見があるが〔春成一九八〇〕、祖先崇拜は血縁関係では血統をたどることが困難な父系制社会で発達するという理解にもとづけば、その可能性は高まる。いずれにしても、これは伊川津や寄倉の多人数集骨とは、形態的には類似するがその内実は異なったものといつてよい。このようにみえてくと再葬の要因や背景も、複雑で多様だったといわざるえない。

## (一) 全身骨再葬と部分骨再葬

縄文後・晩期の再葬における遺骨の取り扱いについては、どのような特色が認められるだろうか。十腰内I式の青森県下六遺跡の再葬甕棺から出土した人骨に考察を加えた森本岩太郎は、表館遺跡〔小片ほか一九七二〕や薬師前遺跡〔市川一九七九〕などの例から、土器棺内の人骨は蹲踞姿勢をとっていたと指摘した。また、薬師前1・3号人骨は椎骨、肋骨の一部が靱帯で連結している間に再葬された可能性を示した〔森本一九八八〕。靱帯の付着により、多少の原形はとどめていても、いったん骨にした遺体を生前の姿に近づけて埋葬することは、意味のあることであろう。森本は、蹲踞位をとることに対しては、現在の東南アジアの民族例を引いて、死の世界からの再生を願望する動機をその背景に想定した。

関東地方の縄文後期の土器棺再葬である坂東山例も、同じような形で全身の骨を再葬している。また、多人数集骨葬においても、特別な骨を取り出して埋葬する傾向はうすい。そして、頭蓋骨から長管骨まで全身の骨を再葬するのが一般的だが、縄文中期の土器棺再葬と晩期の集骨葬に頭骨だけ再葬したと思われる例がある。

こうした全身の骨を再葬する傾向は、晩期の再葬では伊川津遺跡や三貫地遺跡にみられる多人数集骨や盤状集骨に受け継がれ、三貫地遺跡の多人数集骨では頭骨がサークル状に置かれているように、頭骨に重きをおく傾向も認められる。その一方で、滋賀里遺跡、そしておそらく宮崎遺跡の土器棺再葬は頭骨を重視してはいるものの、部分骨の再葬であり、全身の骨を再葬した後期の土器棺再葬とは性格の異なるものであることが推察できる。とくに滋賀里例は頭蓋骨を中心とした部分骨再葬が、土器棺再葬の発達をうながしたとされており、同時期には伊勢湾地方でも埋設土器が急増するので、とくに内陸の遺跡では近畿地方と同一の歩調をとった可能性を考えておかねばならない。盤状集骨葬には頭蓋骨を破壊したり、骨を砕いたりする傾向が指摘できるが、それは中部高地の縄文晩期に発達した焼人骨葬の特徴でもあった。

## (二) 焼人骨葬をめぐる

信濃地方で発達した焼人骨葬は配石遺構と強い結びつきをもち、焼けた獣骨を伴うことが多いことを先に確認した。そもそも、配石遺構と焼獣骨との結びつきは焼人骨のそれよりも古く、縄文前期にさかのぼって

みられ、その分布も広く関東・東北地方の内陸地帯に及ぶ〔高山一九七六・七七〕。それら焼獣骨は碎かれ、撒かれたもののあることが指摘されている。焼人骨は、縄文中期後葉に配石遺構と結びついて信濃地方に出現したのであるから、配石において獣骨を焼いて碎き、そして埋納したり散布する儀礼に、ヒトの骨を焼くという行為が取り込まれていったものとみるのが妥当だろう。大明神遺跡のように獣骨とともに散乱する焼人骨もある。焼人骨は、いずれも多数の遺骸をまとめて埋葬している点〔永峯一九八四、石川一九八八〕、獣骨と同様に破砕されている例のある点が大きな特徴といってよい。民族学からすれば火葬には遺体の徹底破壊という解釈が与えられ〔大林一九六五〕、焼人骨葬は遺骨の破壊という点では盤状集骨葬と一致した形態をとる。これらが性格まで一致したのか即答することはできないが、注目すべきだろう。

焼けた獣骨に対しては、アイヌ民族などにみられるイヨマンテ―物送り―という儀礼をその背景に適用しようという考え〔高山一九七六・七七〕や、狩猟儀礼と結びつける考え〔新津一九八五〕があるが、ヒトの骨を焼くという行為、観念がいかにしてこれとかかわりをもつようになるのか、というメカニズムは明らかにされていない。焼獣骨が動物儀礼において動物の再生を願うためのものであると考えることが許されるならば、徹底的破壊とみえるヒトの焼骨もこの場合は再生の観念と結びつけて理解する説が成り立つかもしれない。一方、縄文時代の基本的な信仰体系はアニミズムであるという立場に立てば、縄文人はシカやイノシシなどの動物にも靈魂の存在を認めているわけで、食糧としての動物が

再生迷奔して人間に災いをもたらさないようにするため、遺骨の徹底的な破壊をおこなったとみることも可能である。そうした説に立てば、前説とは逆に焼人骨葬もヒトの再生迷奔を防ぐためのものであったことになる。<sup>(19)</sup>

焼人骨葬がいかなる背景のもとに生じたのか、という問いに対してはこのようにまったく正反対の解答が二とおり用意できる〔永峯一九八四、渡辺一九八八〕ように、類推は容易なものではない。しかし、焼人骨葬が集骨葬と性格が異なる点に留意し、焼人骨葬や土器棺再葬などの多様な葬法を互いに関連づけて考えれば、解決の糸口を探ることはできよう。春成は、弥生時代の東日本に時折みられる岩陰の焼人骨に対して、これが一次葬と洗骨の場であるという理解を示した〔春成一九八六〕が、弥生時代の再葬墓の土器に納めた人骨は焼けたものが少ないことからすれば、荒巻実らが実証したようにこうした焼人骨は再葬の残余の骨を処理したもの〔荒巻ほか一九八八〕とみるのが妥当だろう。石川は、弥生時代の焼人骨が、多人数の遺骸を処理していることなどから、縄文時代の焼人骨からの系譜的つながりを指摘しており〔石川一九八八〕、弥生時代の焼人骨葬のシステムも縄文時代にさかのぼる可能性はある。こうした可能性の前提には、残余骨の処理としての焼骨に先立つ部分骨の選択があるが、その具体例として、下顎骨のみ埋葬したと考えられる宮崎遺跡の土器棺再葬があげられるであろう。<sup>(19)</sup> 近畿地方の晩期中葉にも部分骨再葬は普及していたようであり、この葬法の地理的広がりも期待できよう。このように考えてくると、縄文晩期の焼人骨も、再葬の際に取り出

された骨の残余を焼いて処理する儀礼を経たもの、と理解することはできないだろうか。つまり、一次葬をおこない、ある場合は部分的な選骨をして再葬し、残りの骨をたとえば寺地遺跡の炉状配石のような施設で焼いて碎き、野口遺跡のような配石遺構に納めたり、大明神遺跡のように撒いたりしたと考えるのである。

こうした解釈が妥当なものであれば、一方で土器棺再葬や集骨葬の形で遺骨の保存がはかられ、一方では遺骨の徹底的な破壊がとられたことになり矛盾するが、こうした現象は実は矛盾ではなく、葬制における一般的ありかたであることが指摘されており〔大林一九六五：三一―三五頁〕、棚瀬襄爾が収集したオセアニアの民族誌にも、遺骨の保存と破壊が同一人の一連の葬礼の過程のうちに同居している例がいくつもあげられている〔棚瀬一九六六〕。つまり一見矛盾する遺骨保存と焼人骨葬などの破壊は、前者が再生を願う心情のあらわれで、後者が再生迷奔を防ぐための措置であると理解することが、ひとつの可能性として考えられるのである。

#### (四) 縄文後・晩期再葬の変遷

大局的にみれば、再葬は縄文後期前葉に東北・関東地方で単葬にまじって付随的にみられるが、なかには制度として発達したものもあり、晩期にいたって中部高地から近畿地方に比較的多く認められるといえよう。縄文時代の土器棺再葬は、再葬甕棺墓という形で縄文後期前葉の北東北地方に発達した。これとの系譜的な関連性については不明といわざる

をえないものの、頭骨に重きをおくという点と、全身の骨を再葬するという点で同様の性格を考えさせる土器棺再葬の類例が北関東地方にもある。さらに下総台地に同時期にみられる多人数集骨葬も、同じように全身の骨を再葬するものであり、この時期に類似した再葬が比較的広範囲に分布していたことを推測させる。しかし再葬甕棺は縄文後期初頭～前葉という限られた時期のものであり、晩期の土器棺再葬との間には断絶を認めざるをえない。これは土器棺再葬だけでなく、再葬一般についていえることであり、下総台地の多人数集骨葬がこの地方で後期後葉～晩期以降に継続するものか否かは明らかでない。つまり、縄文後期中葉～後葉は再葬自体類例が乏しくなる傾向がある。

再び再葬が顕著にみられるようになるのは縄文後期後葉～晩期前葉である。多人数集骨葬は、関東地方から消え、南奥と三河地方にみられるようになる。多人数の遺骸を処理している点と、全身の骨を扱っており、さらに長管骨などを束ねたりする傾向は、地域を隔てたものであるにもかかわらず類似している。また、三貫地遺跡と伊川津遺跡の両者に、合葬形態をとる少人数集骨が存在するのも一致している。しかし、その内実に関しては性別や年齢など被葬者集団のありかたに違いがあって、こうした葬法が関東地方から東西に伝播し、それぞれの地域に定着したとただちに結論づけることはできない。関東地方における縄文後期後半の例や土器の動態などもあわせて検討する必要がある。

盤状集骨葬も含めたこれらの再葬は、全身の骨を再葬していること、頭蓋骨に特別留意している点、多人数の遺骸を処理している合葬の一形

態であることに特色がある。こうした特色が意味するところはなにか。たとえば再葬壺棺墓には遺骨を生前の姿に近づけようという意識があるという森本岩太郎の見解を支持すれば、この場合の再葬の意義は森本が指摘するように死者の再生を願ったと考えるのが妥当である。また、古作遺跡や三貫地遺跡の多人数集骨葬は遺跡の中その他の埋葬の中心に位置する点、権現原例におそらく木柱のような墓標が建てられていた点、三貫地例は他の埋葬に先立って多人数集骨葬が形成されたといわれている点などから、血縁的なつながりを重視し、維持する縄文社会の基礎構造のなから合葬が生まれ、合葬の方法として再葬が時に普遍化したのであり、この場合の多人数集骨葬は祖先を中心とした紐帯が明瞭化していったあらわれだと思われる。

こうした全身骨を再葬する集骨は、晩期前葉以降衰退する。その境目の元刈谷期に盛行する盤状集骨には遺骨破壊の性格が認められ、それはすでに中部高地で同じ時期に盛行する焼人骨にも指摘できたことである。また、縄文晩期中葉に集骨葬に変わるようにして土器埋設土坑が盛行するが、そのいくつかから再葬人骨が発見されているのは示唆的である。近畿地方では滋賀里IV式以降、群集する土器棺墓は減少するという指摘があるが、おそらく新来の木棺墓を含む新たな墓制〔中村一九九一〕の影響が引き金になったものと思われる。これに対して、伊勢湾地方などは、三河地方の麻生田大橋遺跡や尾張地方の馬見塚遺跡など、内陸の非貝塚遺跡で晩期後半以降引き続いて土器棺墓が群集する傾向を指摘することができる。縄文晩期初頭から後半にかけての吉胡遺跡の土器棺に埋葬さ

れた人骨の年齢データや土器棺再葬の乏しさ〔清野一九六九〕からすれば、とうてい土器棺再葬がこの時期の普遍的葬法であったと考えることはできないが、晩期前半の集骨葬を土器棺再葬にかえて在来の葬法が維持された可能性を考える必要がある。こうした遺骨保存の目的をもつ土器棺再葬と遺骨破壊の性格をもつ焼人骨葬を互いに関連づけて理解すれば、部分骨再葬とその残余骨の処理という図式で、矛盾するようにみえる二重構造を理解する道が開ける。部分骨再葬はたんに再葬が形式化・儀式化した〔石川一九八八〕というよりも、遺骨を破壊する必要性が高まったための措置とみたい。このように、集骨葬が晩期前半の境にみられなくなるのに対して、晩期前々中葉に縄文後期以来の再葬法の変化が認められ、土器棺再葬と焼人骨葬が中部高地などの内陸を中心として晩期後半まで命脈を保つのは、弥生時代の壺棺再葬墓の成立を考えるうえで重要な現象である。

いまのところ福島県下では、縄文晩期の土器棺再葬墓は検出されていない。しかし、晩期前半における再葬の状況を考えると、この地方で発達する土器棺の重要性が予察できる。ことに晩期中葉の土器埋設土坑は、まだその形態が壺棺再葬墓との間に懸隔があるとはいえず、壺棺再葬墓が土器棺再葬の一形態であることを考えれば、その起源を考えるうえで注目せざるを得ない。土器棺再葬を含む縄文晩期の埋設土器の系統性や年代、影響関係などを、汎日本列島規模の広い範囲で整理する必要があり。それは土器棺の中身の検出例の増加と、化学的分析方法の開発とともに今後の課題である。



おわりに

弥生時代の東日本で発達する壺棺再葬墓の起源をさぐるために、縄文時代の再葬を後・晩期を中心に整理して、考察した。葬制の研究では人骨の残存状態の良し悪し、すなわち貝塚地帯と内地地帯の差がつねに問題になる。大量に人骨が得られる機会が多い貝塚地帯のありかたを内地に普遍化するのには危険である。逆に内地地帯で一例でも事例が見つければ、その背後には類例の存在が期待できる。今回、結論部分でかなり後者の現象に重きをおいて推測を重ねた部分がある。また、本稿は葬・墓制に関して論じたもので、再葬の意味や背後にある他界観念にまではほとんど迫ることができなかった。それは、再葬に限らず、時を経ることにより再葬などが本来もっていた意味自体、変化している可能性がある。現象の類似が、即同一の意義をもつものといえないことも考慮する必要があるからである。また縄文時代の親族組織や社会組織などに一定の見通しがないと、再葬の意味を探ることは不可能だからである。それをとくはぐす手がかりとなるのは、集落の分析とともに、縄文時代の普遍的葬法と墓地の分析であることはいうまでもない。本稿では、林謙作、春成秀爾の埋葬論に導かれた部分が多いが、いずれ再葬の類例の増加を待って縄文葬墓制の基本的な分析をふまえ、縄文時代の再葬の問題に再び取り組んでみたい。また、再葬の変遷の社会的背景についてもふれずじまいであった。今後の課題である。このように不備なものであるが、

本稿は弥生時代の壺棺再葬に先立つ縄文時代の再葬を整理することを意図したものであるので、所期の目的には一応達したものと考え攔筆する。

一九九二年一月一三日稿了

謝辞

この論文を執筆するうえで、石川日出志、泉拓良、市原壽文、岩崎卓也、大竹憲治、岡田康博、小井川和夫、小杉康、小林青樹、白石太一郎、鈴木保彦、中村健二、西本豊弘、林謙作、春成秀爾、平林彰、福永信雄、森幸彦、山内利秋、山田康弘、渡邊朋和の諸先生、諸氏にさまざまな御教示を賜った。末筆ではあるが記して感謝する次第である。

註

(1) 縄文時代の再葬例は、渡邊朋和の集成(渡邊一九八八)に新たに加えた知見にもとづく。なお、ここで「縄文時代の再葬」とせずに「壺棺再葬墓出現以前の再葬」と表現したのは、壺棺再葬墓が出現する馬見塚式、あるいは大洞A・A'式は縄文時代晩期終末と考えるからである。論題は「縄文時代の再葬」であるが、本稿で扱う範囲は正確には壺棺再葬墓出現以前の再葬である。なお、表について若干の注釈を加えておく。遺跡名は、本文では「遺跡」に統一したが、表では遺跡の性格を含めて表記するようにしたため、貝塚を含む遺跡は「遺跡とせずに「貝塚」とした。人骨の部位が多岐にわたる場合「骨」の骨は省略した。部分欠失人骨は、はじめから人体のある部分がなかったものと、骨化後に取り出したものとの区別をつけたいものもある。後者だけを取り上げた。散乱骨は焼人骨だけを取り上げた。表には再葬か否か問題はあがるが、縄文早期の集骨も含めた。

(2) 民族学・民俗学でいうところの複葬制を示すと考えられる考古学的事例はいくつもあげることができるが、研究者間で用いる用語に統一性がない。洗骨葬、二次葬、多次葬、二重葬、改葬、複葬、再葬など、じつにさまざまである。改葬という用語に限れば、これは考古学では古墳時代の横穴式石室の石棺などによくみられる、追葬の際の先葬者のかたづけなどに用いられる。この場合は、遺体を骨にして、さらに葬儀をおこなうという意識

のもとになされたものではない〔都出一九八六〕。その他の用語もそれぞれ問題があるが、いずれにしても再葬、改葬、復葬といった概念に対しては定義が必要である。

(3) 縄文・弥生時代の再葬は、その方法からみると基本的に、骨を集めてたんに埋葬する土葬と、骨を土器に納めて埋葬する土器棺葬とに分類できる。前者を「集骨葬」、後者を「土器棺再葬」とし、壺を多用した土器棺再葬を「壺棺再葬」〔石川一九八二〕と呼称する。用語や概念規定の問題に関しては議論しなくてはならないことが山積しているが、別稿に譲りたい。

(4) 少人数集骨葬という呼び名も、練れたものではないが、一応この名で多人数集骨葬と呼び分けておく。なお、少人数と多人数の界線であるが、前者は五体くらいまでであるのに対して、後者の多くは十数体以上のものであり、その中間の人数の集骨葬はまれである。ただ、祇園原遺跡などでは形態的に多人数集骨葬と同一のもので五体以上、六体以上と報告されている例もあり、個体の数だけでは決められない。盤状集骨は、一般的に盤状集積の名で呼ばれる。しかしこれは清野謙次が「人骨の盤状集積」と呼んだもの〔清野一九二五〕の前半部分が脱落して横行した呼び名である。これでは何を集積しているのかわからないし、集骨の一形態であることから学史に背くがこう呼んだ。

(5) 再葬を経していない、たんなる埋葬を複葬に対して単葬という〔大林一九六五・春成一九八八〕。

(6) 番外Bの人骨に、後期末以降にあらわれる2C型の抜歯〔春成一九七三など〕人骨が二体伴うのもその想定妥当性を裏づける。森幸彦は多人数集骨がまず形成されたのちに、まわりの埋葬がおこなわれたと考えたが、これが正しければ埋葬人骨の多くは後期末〜晩期前半のものとなる。

(7) 桐原健は、これらの土坑を歴史時代のもものと考えている〔桐原一九八八〕。緑釉陶器を伴う土坑もありその時代のものも含まれるが、人骨の解剖学的所見は、縄文人的形質を示す〔西沢一九八〇〕。また、縄文土器の土器棺を納めた土坑にも人骨は共伴する。

(8) 福永信雄教示。  
 (9) これらの人骨は破損を受けているように見えるが、人為的な破損とすれば、盤状集骨とのかかわりが問題にならう。

(10) この墓は、一般的に「改葬甕棺墓」と呼ばれる〔江坂一九六八〕。葛西勸

は、改葬は概念的に偶発的な改葬と意識的な改葬に分類でき、改葬甕棺墓は後者にあたることとした〔葛西一九七三〕。このように改葬を概念区分しても、言葉のうえで問題を生じる。意識的であり普遍的である改葬を再葬と呼ぶなら、これも再葬甕棺墓というべきであらう。一九八三年の段階でこの種の遺跡は三六遺跡も発見されており、意識的で、独自の墓制として普遍化しているといえるからである。再葬甕棺墓といっても、この葬制にかかわる施設は甕棺ばかりではない。青森県堀合一号遺跡では一二基の石棺が検出されているが〔葛西一九八二〕、このうちの二基には二次的に移動した成人の部分骨が入っていた。また、青森県小金森遺跡では、再葬甕棺墓と、人骨の入ったフラスコ状土坑が検出された〔葛西一九七四〕。葛西はこれらの石棺や土坑を一次葬を含めた再葬にかかわる施設と考えている。この想定が正しいとすれば、十腰内一式、すなわち縄文後期初頭〜前葉の青森県を中心とした墓制は、石棺あるいは土坑を一次葬の場とし、甕棺あるいは石棺を再葬の場とするシステムティックな再葬であったといえよう。

(11) このほか、九州で縄文時代の土器棺再葬墓が報告されている。九州では、後期後半の西平式以降、群墓的性格の土器棺墓が発達する。福岡県浄土院遺跡では、成人女性の焼骨が西平式の甕の中から出土した〔小田ほか一九七二〕。長崎県後遺跡では、後期後葉の土器棺に焼骨が入っており、報告者は成人人骨としているが、内藤芳篤はヒトと断定するのは無理だとしている〔諫見ほか一九七六〕。鹿児島県上加世田遺跡は晩期初頭、福岡県曲り田遺跡は夜臼式であり、ともに土器棺から焼骨が出土している〔橋口一九八三〕が、人骨とは断定できない。大分県ネギノ遺跡の合口土器棺は、晩期終末であるが、一〇歳以上、二〇歳以下の臼歯3本が納められていた〔鏡山一九五三〕。これらの諸例が、近畿地方以東の土器棺再葬墓とどのようなかわりをもつのかは明らかにはしたい。焼骨が多い点が注目できる。

(12) 柳田国男は、火葬に「二度の葬式」という古来の遺風を認めている〔柳田一九二九〕。現在の火葬も、広い意味では複葬制の一種である。

(13) 盤状集骨は、白石太一郎は偶然の所産であるとし〔白石一九七五〕、都出比呂志も改葬との区別が困難なことを指摘している〔都出一九八六〕が、石川・上敷領のほか、久永春男〔久永ほか一九七五〕・春成秀爾〔春成一九八八〕らは、風習としての再葬の一形態とみている。

(14) 上敷領は、頭骨の破碎や再配列から、正しくない死に方をしたものと

- られた葬法であるとする。これに対して春成は、悪い死者の復活を恐れた再葬ならば、死後ただちになされるはずであり、土葬したのちなされたこの葬法に対する解釈としては、不合理であると考えている。
- (15) 春成は伊川津遺跡では2C型のほかに4I型技術人骨が集中する埋葬区存在を暗示しており、再葬と2C型技術との関連に対しては消極的である(春成一九八八)。結論は今後に委ねられる。
- (16) 数体〜十数体からなる埋葬の小単位。これが集合して墓域が構成される。被葬者を何らかの原理にもとづいて群別するようになって生じたものである。東北地方では中期末以降、関東地方以西は後期中葉以降顕在化するとされる。埋葬小群については、(林一九七七・一九八〇)、『春成一九八〇』などを参照されたい。
- (17) 加曾利北例は関東地方における埋葬小群成立時という微妙な時点であり、これは廃屋に夫婦を核とする家族を葬った、居住原理が優先した世帯墓であるので、他の例とは同列に扱えず、ここでは保留する。
- (18) 春成は伊川津遺跡の分析から、多人数集骨葬を疫病などで死んだ者を再葬したものと考え、再葬の理由として骨肉一体のよみがえりを恐れたものと解釈した(春成一九八八)。渡邊朋和は、上敷領が盤状集骨にくだした解釈に対して、「死者の復活⇨悪霊の災いを防ぐための遺体変形とする解釈も、遺体の破壊⇨肉体と靈魂の分離と考えるならば、まったく違ったものになろう」と指摘している(渡邊一九八八)。棚瀬真爾が集めたメラネシアやニューギニアなどのオセアニア地方の再葬にかかわる民族誌には、多様な再葬の要因があがっているが、死霊を慰撫する手段としておこなわれる例が散見される(棚瀬一九六六)。
- (19) しかし、土器棺に焼人骨を納めた場合もあるので、残余人骨の処理や埋納には石棺や土坑ばかりでなく、土器も使われたようである。近畿地方の例のように部分骨再葬と土器棺再葬とは一体性をもって展開すると考えられるが、土器を再葬の施設として利用する方法は多様だったとみるべきだろう。
- (20) 縄文後期にいたり、再葬が顕著になるのは、それ以前の他界観との間に何らかの変化が生じたことを意味していよう。青森県では、居住域と墓域とが分離する傾向を、この時期にうかがうことができる。縄文後期前葉に、葬制上の大きな画期が存在したと想定できるが、この問題は、縄文再葬の

背景の問題とともに、今後の研究に委ねたい。

- (21) 近畿地方で土器棺墓が滋賀里Ⅲ・Ⅳ期に発達するのはほぼ同時に、愛知県吉胡遺跡でも土器棺が発達するが、そのデータは再葬には否定的である(清野一九六九)。つまり、この時期の土器棺は乳・幼児埋葬である。この点については、以下の二点の問題があることを確認しておきたい。まず、乳児は単葬でも問題はないが、幼児は単葬か否かを吟味する必要のあることが指摘されている(菊池一九八二点である。もう一点は、縄文晩期の土器棺再葬と、弥生時代の壺棺再葬がある部分で連続するものと仮定すると、弥生時代のそれは内陸の山沿いを中心に分布する傾向が注意されていることである。縄文晩期の吉胡遺跡では、内陸の非貝塚地帯と比較して土器棺再葬は盛んでなかった可能性もあるだろう。吉胡遺跡からも土器棺再葬墓は検出されているが、いずれも弥生時代の壺棺再葬墓である。これは、内陸の墓制が貝塚地帯まで弥生時代に普及したと理解することで、一応の説明はつく。

#### 参考文献

- 会田進・西沢寿晃ほか 一九八六『梨久保遺跡』(『郷土の文化財』一五)長野県岡谷市教育委員会。
- 麻生優・内藤芳篤 一九六八『岩下洞穴の発掘記録』佐世保市教育委員会。
- 阿部恵・百々幸雄ほか 一九八六『田柄貝塚』(『宮城県文化財調査報告書』第一一集)宮城県教育委員会。
- 荒巻実・若狭徹・宮崎重雄・外山和夫・飯島義雄 一九八八『沖』遺跡における「再葬墓」の構造―出土骨類の分析から―『群馬県立歴史博物館紀要』第九号 五九〜九八頁。
- 新谷和孝・西沢寿晃 一九八八『大明神遺跡―長野県木曾郡大桑村大明神遺跡緊急発掘調査報告書―』大桑村教育委員会。
- 池葉須藤樹 一九七一『岡山県児島郡灘崎町彦崎貝塚調査報告』。
- 石川日出志 一九八一『三河・尾張における弥生文化の成立―水神平式土器の成立過程について―』『駿台史学』五二号 三九〜七二頁。
- 石川日出志 一九八三『いわゆる再葬墓研究の現状』『一九八三年度駿台史学会大会研究発表要旨』八〜九頁 駿台史学会。
- 石川日出志 一九八四『岩尾遺跡出土資料の編年的位置と特色』『史館』第一

- 六号 七一〜八四頁。
- 石川日出志 一九八七「再葬墓」『弥生文化の研究』八 一四八〜一五三頁 雄山閣出版。
- 石川日出志 一九八八「縄文・弥生時代の焼人骨」『駿台史学』七四号 八四〜一一〇頁。
- 猪狩忠雄 一九八八「屋敷前遺跡―縄文―江戸時代の調査―」(『いわき市埋蔵文化財調査報告』第二一冊) 福島県いわき市教育委員会。
- 市川金丸 一九七九「三戸郡倉石村出土の縄文時代後期竊棺土器について」『青森考古学会会報』第二二号(未見)。
- 市川金丸・森本岩太郎ほか 一九七六「泉山遺跡発掘調査報告書」(『青森県埋蔵文化財調査報告書第三一集』) 青森県教育委員会。
- 宇田川洋 一九七七「北海道の考古学」2。
- 江坂輝弥 一九六七「青森県久栗坂山野崎遺跡」『考古学ジャーナル』二二一〜二二二頁。
- 江坂輝弥 一九六八「縄文土器文化後期における改葬竊棺墓の研究」『北奥古代文化』創刊号 三〜七頁。
- 遠藤正夫ほか 一九八一「鷹架遺跡」(『青森県埋蔵文化財調査報告書』第63集) 青森県教育委員会。
- 大竹憲治 一九九二「阿武隈山地東縁部における縄文晩期の再葬墓的墓制」『いわき地方史研究』第二九号 三二〜三九頁。いわき地方史研究会。
- 大竹憲治ほか 一九八三「道平遺跡の研究―福島県道平における縄文時代後・晩期埋設土器群の調査―」福島県大熊町教育委員会。
- 大竹憲治ほか 一九八九「大越・館遺跡」(『大越町埋蔵文化財調査報告』第三冊) 福島県大越町教育委員会。
- 大塚和義 一九七九「縄文時代の焼けた人骨について」『八天遺跡』(『北上市文化財調査報告』第二七集) 北上市教育委員会。
- 大林太良 一九六五「葬制の起源」角川書店。
- 大山柏・竹下次作・井出佐重 一九四一「山梨県日野春村長坂上条発掘調査報告」『史前学雑誌』一三卷三号。
- 岡崎文喜・小片 保ほか 一九七四「宮本台 縄文時代後期の貝塚および集落跡の調査」『船橋市教育委員会』。
- 岡崎文喜・森本岩太郎ほか 一九八三「古作貝塚」―縄文時代後期貝塚の調査―『船橋市遺跡調査会』。
- 小片保・森本岩太郎・江坂輝弥 一九七一「青森県表館発見の縄文文化後期初頭の竊棺と人骨」『考古学ジャーナル』六三 七〜八頁。
- 小田富士雄・内藤芳篤ほか 一九七二「福岡県京都町浄土院遺跡調査概報」浄土院遺跡調査団。
- 小野崎満 一九七四「縄文文化における葬制―特に改葬について―」『遮光器』八号 一〇〇〜一二二頁。みちのく考古学研究会。
- 鏡山猛 一九五三「竊棺考(一)―遠賀川式竊棺とその源流―」『史淵』第五五輯 二五〜五一頁。
- 賀川光夫 一九六七「大分県川原田洞穴」『日本の洞穴遺跡』二八三〜二八七頁 平凡社。
- 賀川光夫 一九六七「大分県大恩寺稻荷岩陰」『日本の洞穴遺跡』二八八〜二九三頁 平凡社。
- 賀川光夫・内藤芳篤・橘昌信・山崎純男 一九七七「大分県粉洞穴発掘調査概報―第1・2次調査―」『考古学論叢』4 八〜一〇頁。
- 葛西勳 一九七四「青森県下の縄文文化後期の改葬竊棺墓遺跡について―青森県南津軽郡平賀町唐竹地区の発掘調査から―」『北奥古代文化』六号 三五〜四八頁。
- 葛西勳 一九七五「青森市山野崎石器時代墳墓遺跡について」『北海道考古学』第一一 二七〜三九頁。
- 葛西勳 一九七八「青森県月見野遺跡発見の縄文後期の竊棺と人骨」『燃木文』七号(未見)。
- 葛西勳 一九八三「縄文時代中期、後期、晩期(葬制の変遷)」『青森県の考古学』二二〜三〇頁 青森大学出版局。
- 葛西勳・小片保ほか 一九七四「青森県平賀町唐竹地区埋蔵文化財発掘調査報告書」青森県平賀町教育委員会。
- 笠井新也 一九一八「陸奥国発見の石器時代の墳墓について」『考古学雑誌』九卷二号 六五〜八五頁。
- 加藤岩蔵 一九六八「衣浦湾東岸における縄文晩期貝塚」『半田市史 資料編』一〇〇頁〜一〇五頁。
- 加藤修ほか 一九七三「湖西線関係遺跡調査報告書」湖西線関係遺跡発掘調査団。

- 金子浩昌・米山一政・森嶋稔 一九六五「長野県埴科郡戸倉町市田遺跡調査報告その2」『長野県考古学会誌』一〇号 一〇三〜一二頁。  
 上敷領久 一九八七「盤状集積葬考」『史学研究集録』第二二号 二五〜三九頁 国学院大学日本史学専攻大学院会。  
 川越哲志 一九七八「帝釈猿神岩陰遺跡の調査」『広島大学文学部帝釈峽遺跡群発掘調査室年報』一 一六〜二〇頁 広島大学文学部帝釈峽遺跡群発掘調査室。  
 河瀬正利 一九八八「帝釈峽遺跡群の埋葬」『日本民族・文化の生成』1 〇永井昌文教授退官記念論文集』二二七〜二四九頁。  
 菊池実 一九八三「甕棺葬」『縄文文化の研究』九 五七〜七一頁 雄山閣出版。  
 喜田貞吉 一九三四「青森県出土洗骨入土器」『歴史地理』六三卷六号 八四〜八八頁。  
 清野謙次 一九二二「肥後国下益城郡阿高村西阿高貝塚」『民族と歴史』八卷三号 三〇〜三四頁。  
 清野謙次 一九二五『日本人の研究』岡書院。  
 清野謙次 一九四三「発掘余論」『増補日本人の研究』二二六〜二六五頁 萩原屋文館。  
 清野謙次 一九四九「日本石器時代人骨の埋葬状態」『古代人骨の研究に基づく日本人種論』一四四〜一八二頁 岩波書店。  
 清野謙次 一九六九「三河国宝飯郡小坂井村大字平井字稻荷山貝塚」『日本貝塚の研究』一三六〜一七一頁 岩波書店。  
 清野謙次 一九六九「三河国渥美郡田原町大字吉胡字矢崎貝塚」『日本貝塚の研究』一九九〜二五四頁 岩波書店。  
 桐原健 一九八八「奈良・平安時代の信仰と葬制」『長野県史考古資料編一巻(四)』九六三〜一〇〇四頁。  
 工藤清泰 一九七九「松山遺跡」浪岡町教育委員会(未見)。  
 隈昭志・内藤芳篤ほか 一九八四『沖ノ原遺跡―熊本県天草郡五和町二江―』五和町教育委員会。  
 国分直一 一九六八「わが先史古代の復葬とその伝統―移葬型と移葬略化型をめぐって―」『日本民俗学』第五八号 一〇〜二〇頁。  
 後藤和民ほか 一九七七『加曾利北貝塚』中央公論美術出版。
- 小林秀夫 一九八一「宮遺跡」『長野県史考古資料編一巻(二)』一五七〜一六一頁。  
 斎藤忠 一九七七「日本における再葬(洗骨葬)の展開」『大正大学研究紀要』第六三輯 一〇三五頁。  
 志賀敏行 一九八六「遺構内出土土器」『霊山根古屋遺跡の研究』四五〜七六頁 霊山根古屋遺跡調査団。  
 宍倉昭一郎・小片保ほか 一九七二「加曾利貝塚」中央公論美術出版。  
 信濃史料刊行会編 一九五六『信濃考古綜覧』下巻。  
 設楽博己 一九九一「最古の壺棺再葬墓―根古屋遺跡の再検討―」『国立歴史民俗博物館研究報告』第三六集 一九五〜二三八頁。  
 白石太一郎 一九七五「考古学より見た日本の墓地」『日本古代文化の探求・墓地』一一〜七六頁 社会思想社。  
 末永雅雄 一九四四「宮滝の遺跡」『奈良県史蹟名勝天然記念物調査会報告』第一五冊(奈良県教育委員会)。  
 末永雅雄ほか 一九六一「橿原」『奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告』第一七冊(奈良県教育委員会)。  
 杉浦重信・百々幸雄・石田肇 一九八八「無頭川遺跡」北海道富良野市教育委員会。  
 杉原莊介 一九六八「福島県成田における小堅六と出土土器」『考古学集刊』四卷二号 一九〜二八頁。  
 杉原莊介・大塚初重 一九七四「千葉県天神前における弥生時代中期の墓址群」『明治大学文学部研究報告』考古学第四冊。  
 鈴木隆雄ほか 一九八四「美沢川流域の遺跡群」Ⅶ 北海道埋蔵文化財センター。  
 鈴木正博 一九八五「荒海式」生成論序説』『古代探叢』Ⅱ。  
 須藤隆 一九九〇「東北地方における弥生文化」『伊東信雄先生追悼考古学古代史論叢』二四三〜三二二頁。  
 須藤隆ほか 一九八四「福島県会津若松市墓料遺跡 一九八〇年度発掘調査報告書」会津若松市教育委員会。  
 澄田正一・島五郎ほか 一九七〇「馬見塚遺跡」『新編一宮市史』資料編一 三七〜一三三頁。  
 関孝一 一九六六「長野県埴科郡保地遺跡発掘調査概報」『考古学雑誌』五一

卷三号 二五〇四三頁。

関雅之ほか 一九七五『浜田遺跡』真野町教育委員会。

関雅之・森沢佐歳ほか 一九八七『寺地遺跡』新潟県青海町。

鷹司信克・児玉茂幸ほか 一九五四『菅田高田貝塚』学習院高等科史学部。

鷹野光行 一九八三『祇園原貝塚』Ⅲ(『上総国分寺台発掘調査概要』)上総国

分寺台発掘調査団。

高橋忠彦・山口敏ほか 一九八一『藤株遺跡発掘調査報告書』(『秋田県文化財

調査報告書』第八五集)秋田県教育委員会。

高橋信武・吉留秀敏 一九八二『横尾貝塚発掘調査概報』大分県教育委員会。

高山純 一九七六・七七『配石遺構に伴出する焼けた骨類の有する意義』(『

(下)』『史学』四七巻四号 三五〇六五頁、四八巻一号 四九〇七四頁。

橋宜忠・田中正明 一九七四『飛騨桜洞・沖田 飛騨桜洞・沖田遺跡発掘調査

報告書』萩原町教育委員会。

橘昌信 一九八〇『大分県二日市洞穴発掘調査報告書』別府大学付属博物館。

田中国男 一九四四『縄文式弥生式接触文化の研究』。

田中良之・土肥直美 一九八八『出土人骨の親族関係の推定』『伊川津遺跡』

(『渥美町埋蔵文化財調査報告書』4)渥美町教育委員会。

棚瀬襄爾 一九六六『他界観念の原始形態』(『東南アジア研究双書』1)京都

大学東南アジア研究センター。

出口剛・江原昭善ほか 一九九二『平井稻荷山』小坂井町教育委員会。

都出比呂志 一九八六『墳墓』『岩波講座日本考古学』四 二二七〜二六七頁

岩波書店。

土肥直美・田中良之・船越公威 一九八六『歯冠計測値による血縁者推定法と

古人骨への応用』『人類学雑誌』九四巻二号 一四七〜一六二頁。

戸沢充則・堀部昭夫ほか 一九七六『帝釈寄倉岩陰の調査』『帝釈峽遺跡群』

帝釈峽遺跡群発掘調査団 四一〜七九頁。

外山和夫・宮崎重雄ほか 一九八九『板倉遺跡』『板倉町史考古資料編』別巻

九 板倉町史編纂委員会。

永井昌文ほか 一九七二『山鹿貝塚』福岡県遠賀郡芦屋町山鹿貝塚の調査』

山鹿貝塚調査団。

永峯光一 一九八四『森と浜の墓(縄文時代)』『季刊考古学』第九号 一八〜

二二頁。

中村健二 一九九一『近畿地方における縄文晩期の墓制について』『古代文化』

四三巻一号 一七〜三一頁。

中村五郎 一九八二『畿内第一様式に並行する東日本の土器』。

中山英司ほか 一九五二『吉胡貝塚』『埋蔵文化財発掘調査報告』第二(文化

財保護委員会)。

並木隆・小片保ほか 一九七三『坂東山』(『埼玉県埋蔵文化財調査報告書』第

二集)埼玉県教育委員会。

新津健 一九八五『縄文時代後晩期における焼けた獣骨について』『日本史の

黎明』八幡一郎先生頌寿記念考古学論集』一二五〜一五三頁。

新津健・金子浩昌ほか 一九八九『金生遺跡』Ⅱ(『山梨県埋蔵文化財センター

調査報告書』第四一集)山梨県教育委員会。

西村正衛 一九五一『横須賀市茅山貝塚』『日本考古学年報』一 五四〜五六頁。

野坂洋一郎ほか 一九八二『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書』盛岡市野

内遺跡(一)』岩手県教育委員会。

橋口達也ほか 一九八三『石崎曲り田遺跡』(『今宿バイパス関係埋蔵文化財

調査報告』第八集)福岡県教育委員会。

塙静夫 一九八四『大谷観音』九〜一〇頁 天開山大谷寺。

花輪宏・山口敏 一九八七『堀之内』市川市教育委員会。

林和男・西沢寿晃ほか 一九七九『深町』深町遺跡緊急発掘調査概報』小泉

郡九子町教育委員会。

林謙作 一九七七『縄文期の葬制 第Ⅱ部遺体の配列、とくに頭位方向』『考

古学雑誌』六三巻三号 一〜三六頁。

林謙作 一九八〇『東日本縄文期墓制の変遷(予察)』『人類学雑誌』八八巻三

号 二六九〜二八四。

林謙作・山口敏ほか 一九七九『八天遺跡』(『北上市文化財調査報告』第二七

集)北上市教育委員会。

林茂樹 一九八三『野口遺跡』『長野県史考古資料編』一卷(三) 八九四〜八

九七頁。

林茂樹・本田秀明 一九六二『野口墳墓遺跡調査概況』長野県伊那市手良区野

口』『伊那路』六巻一〇号 三九〇〜四〇四頁。

春成秀爾 一九七三・七四『抜歯の意義』『考古学研究』二〇巻二号 二五〜

- 四八頁・三号 四一〜五八頁。  
 春成秀爾 一九八〇「縄文合葬論―縄文後・晩期の出自規定―」『信濃』三三・卷四号 一〜三五頁。  
 春成秀爾 一九八六「弥生時代」『図説 発掘が語る日本史』第二卷 関東・甲信越編 一六〜一五六頁 新人物往来社。  
 春成秀爾 一九八八a「葬送の世界」『原像日本』二卷 一六八〜一八八頁 旺文社。  
 春成秀爾 一九八八b「埋葬の諸問題」『伊川津遺跡』渥美町教育委員会。  
 春成秀爾・西本豊弘・江原昭善ほか 一九八八「伊川津遺跡」『渥美町埋蔵文化財調査報告書』四 渥美町教育委員会。  
 樋口昇一 一九六七「長野県西筑摩郡大明神遺跡」『日本考古学年報』一五 一三〜一四頁。  
 樋口昇一 一九八三「大明神遺跡」『長野県史考古資料編』一卷(三) 一七四〜一八三頁。  
 久永春男・斎藤嘉彦 一九七五「盤状集積葬の新例」『どるめん』五号 一〇七〜一〇九頁。  
 藤沢宗平 一九五〇「考古学的に見た木曾谷の史前文化」『信濃』二卷七号 四六〇〜四七〇頁。  
 富士基勇・永井昌文ほか 一九七一「神田遺跡 第1次発掘調査概報」山口県教育委員会。  
 古田正隆ほか 一九七五「筏遺跡―縄文後・晩期の埋葬遺跡―」『百人委員会埋蔵文化財報告』第四集 百人委員会。  
 星田享二 一九七四「再葬墓とその社会」『遮光器』八号 一〇六〜一二二頁 みちのく考古学研究会。  
 星田享二 一九七六「東日本弥生時代初頭の土器と墓制―再葬墓の研究―」『史館』第七号 一〇〜五二頁。  
 牧富也・杉浦牧太郎・神谷和正 一九七三「枯木宮貝塚」『西尾市史』1 西尾市史編纂委員会。  
 三浦和信・溝口優司ほか 一九八七「沓掛貝塚―一般県道大網停車場丘山線事業地内埋蔵文化財調査―」千葉県文化財センター。  
 武藤鉄城 一九五一「八津の環状石籠墳群」『考古学雑誌』三七卷四号 五〇〜五一頁。  
 百瀬長秀・西沢寿晃ほか 一九八二「御社宮司遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―茅野その5―』長野県教育委員会。

- 財包蔵地発掘調査報告書―茅野その5―』長野県教育委員会。  
 森幸彦・森本岩太郎ほか 一九八八「三貫地貝塚」『福島県立博物館調査報告』第一七集 福島県立博物館。  
 森嶋稔 一九八二「幅田遺跡」『長野県史考古資料編』一卷(二) 一二九〜一四〇頁。  
 森本岩太郎 一九八八「本州北端における縄文時代後期改葬壟棺内人骨について」『日本民族・文化の生成』1 永井昌文教授退官記念論文集 五五〜七六頁。  
 森本岩太郎・小片丘彦・小片保・江坂輝弥 一九七〇「受傷寛骨を含む縄文早期の二次埋葬例」『人類学雑誌』七八卷三号 二三五〜二四四頁。  
 矢口忠良・青木和明・西沢寿晃ほか 一九八八「宮崎遺跡」『長野市の埋蔵文化財』第二八集 長野市教育委員会。  
 谷沢靖・都築義秀・江原昭善・渡辺毅 一九七二「本刈谷貝塚」愛知県刈谷市教育委員会。  
 柳田国男 一九二九「葬制の沿革について」『人類学雑誌』四四卷六号 二九五〜三一八頁。  
 山内幹夫ほか 一九八五「母畑地区遺跡発掘調査報告 荒小路遺跡・地藏田A遺跡」『福島県文化財調査報告書』第一四八集 福島県教育委員会。  
 吉田格 一九六四「三貫地貝塚」『福島県史』第六卷資料編一 二一九〜三二頁。  
 吉村博恵・多賀谷昭ほか 一九八三「千手寺・日下遺跡発掘調査概報」『東大 阪市埋蔵文化財包蔵地調査概要』二四 東大阪市教育委員会。  
 吉村博恵・多賀谷昭ほか 一九八五「千手寺・日下遺跡発掘調査概要」第11・12次調査」『東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概要』二六 東大阪市教育委員会。  
 米田耕之助ほか 一九七七「西広貝塚」『上総国分寺台遺跡調査報告』Ⅲ 上総国分寺台遺跡調査団。  
 米田耕之助 一九八〇「縄文時代後期における一葬法」『古代』六七号 三一〜三八頁。  
 諫見富士郎・内藤芳篤ほか 一九七六「統・筏遺跡―主として第6次調査の新資料を中心に―」『百人委員会埋蔵文化財報告』第六集 百人委員会。  
 渡邊朋和 一九八八「縄文時代の複葬制について」『新潟考古学談話会会報』第二号 一〜四頁。  
 (国立歴史民俗博物館考古研究部)

## Reburials in the Jōmon Period

SHITARA Hiromi

The method of burial in which the body is ossified then reburied is called reburial. In the early Yayoi period (B.C. 3C ~ A.D. 1C) in eastern Japan, the jar reburial grave, using large jars as cinerary urns, became widespread. The origins of this should be examined, going back to the reburial of the Jōmon period.

Reburial in the Later and Final Jōmon period (B.C. 2000 ~ 300) was spread over a relatively wide area, from the southern Tōhoku District to the Kinki District, though there was little in the way of a universal method of burial. Examples of reburial methods are as follows: bone-gathering burial, in which bones were gathered together; ceramic coffin burial, in which bones were placed in ceramic jars; board-type bone gathering burial, in which bones were broken and assembled into a square board; and bone-burning burial, in which bones were burned and buried. Reburials in the Later and Final Jōmon period are not uniform at all.

Reburial in the Final Jōmon period (B.C. 1000 ~ 300) in the Central Highland is characterized by bone-burning burial, in which a large number of bodies were dealt with at a time. This type of burial spread into the Hokuriku District, and was also transmitted to the Ise Bay Area and the Kinki District. On the other hand, the bone-gathering burial of the Ise Bay Area might have asserted some influence on reburials in the Central Highland. As to how the bones were dealt with at reburials, the reburial of all the bones, which was prevalent in the Later Jōmon period, and the tendency to place importance on the skull, were carried over to the beginning and first half of the Final Jōmon period. Later, on the other hand, the reburial of some bones, and the practice of breaking bones, that dated back to the Middle Jōmon period (B.C. 3000 ~ 2000), were spread over a relatively wide area. In this way, the manner in which bones were handled changed, the early Final Jōmon period being the period of transition.

In the Kinki District in the middle of the Final Jōmon period, ceramic coffin burials, connected with partial reburial were carried out. If the ceramic coffin reburial is regarded as a partial-bone reburial, the bone-burning can be looked on as the disposal of the remaining ashes. A double structure can be supposed, wherein the necessity of breaking bones increased, and at the same time, measures were taken to conserve a part of the bones. In the inland region from the Kinki District to the Central Highland, where various forms of burial and reciprocally-influential relationships can be observed, the ceramic coffin reburial and bone-burning burial, though examples are few, continued to the end of the Final Jōmon period, while the bone-gathering burial declined in the middle of the Final Jōmon period. This is an important phenomenon to be considered regarding the establishment of the jar-reburial grave in the Yayoi period.